

はつ か の
白ヶ野第2・第3遺跡

東九州自動車道(西都～清武間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XI

(第1分冊 繩文時代草創期・早期編)

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第52集 白ヶ野第2・第3遺跡』(2002)

正誤表

訂正箇所	誤	正
目次	第4節 2 土器の特徴……198	第4節 2 土器の特徴……197
"	第4節 3 遺物の出土位置について	第4節 3 遺物の出土位置
巻末 報告書抄録 副書名	東九州自動車道（西都～清武間）建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 VI	東九州自動車道（西都～清武間）建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XI



白ヶ野第2・第3遺跡全景

序

本書は、日本道路公団より委託を受け、平成7年度および8年度に宮崎県教育委員会が実施した白ヶ野第2・第3遺跡の発掘調査報告書の第1分冊です。

白ヶ野第2・第3遺跡は、縄文時代から中世にかけての先人の生活の場であったことが判明しましたが、中でも遺物の出土量が最も多く、また多数の遺構が確認された時期が縄文時代の早期であります。その頃、当地域では自然環境に適応しながら独自の文化を育んでいったものと推察されますが、一方で、土器に付けられた文様や石器の石材などから広域にわたる人、物、情報の交流の跡をうかがい知ることができます。本書が地域の文化財並びに歴史に対する理解の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、多大なご協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各位に対し心から感謝申し上げます。

平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

例　　言

- 1 本書は、東九州自動車道（清武～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した白ヶ野第2・第3遺跡の発掘調査報告書の第1分冊である。縄文時代草創期と早期の遺構・遺物についての報告であり、縄文時代前期以降については第2分冊に掲載している。
- 2 本遺跡は、発掘調査・整理作業中は「白ヶ野遺跡」と称されていたが、清武町教育委員会発行の遺跡詳細分布調査報告書の遺跡名にあわせ、遺跡名を標記のとおり変更する。ただし、現地での記録や遺物注記などの記録類については変更を加えていない。
- 3 現地での平面図作成、写真撮影は、各調査員が行った。
- 4 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、遺物の実測、製図は整理作業員の協力のもと、各調査員が行った。
- 5 本書の編集は、宮崎県埋蔵文化財センター主査 吉本正典が行った。
- 6 本文の執筆は、青山尚友、藤木 聰、吉本が行った。
- 7 本書で示す北は、基本的に磁北である。座標北（国土座標第Ⅱ系）を示す場合は、「G. N」を標記している。
- 8 土層断面図および土器の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』による。
- 9 本書で示した遺構の略号は、以下のとおりである。

S A · · 壱穴住居跡・壹穴遺構	S B · · 掘立柱建物	S C · · 土坑
S I · · 集石遺構		

- 10 第3章第5節および第IV章の各項においては、図、表の番号は独立したものとなっている。
- 11 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

図面・観察表について

土器実測図

- 1 土器実測図の縮小率は、 $1/3$ を基本にしている。これは実物大で作成した原図を33.3%縮小したものである。
- 2 土器実測図の径の推定は、原則として $1/6$ 以上残存している場合に行った。ただし、縄文土器に関しては歪みの大きい個体もあり、状況に応じて判断している。
- 3 径の復元に至らなかった土器個体については、基本的に左から外面、内面の順に拓影によって文様・調整を表現している。
- 4 土器の傾きの確定しないもの、疑問が残る場合については口縁部線を破線で表現した。ただし、その他の個体でも、特に小破片、胴部のみの破片に関しては、必ずしも確定した傾きでないことを明記しておきたい。
- 5 波状口縁を呈する土器の中で、径の復元に至らなかったものについては、波線「記号」で示している。
- 6 土器の調整の表現に関して、ケズリとの境には、▲印を付している。

土器観察表

- 1 胎土については、混入物の中で特徴的な物質の色調、大きさを記している。鉱物名は、肉眼で明確に判断できる場合のみ記入した。
- 2 調整・文様の中で、「丁寧なナデ」は器面に擦過痕の残らないような場合、「ケズリ状ナデ」「工具ナデ」は、器面にヘラ状工具による粗い擦過痕の残る場合で、特に前者については、他の調整部位との間に稜線を形成する。

石器実測図

- 1 石器実測図の縮尺率は、細石刃・細石刃核が1／1、敲石類・礫器が1／3、石皿類が1／4であり、それ以外はすべて2／3に統一している。
- 2 欠損部を持つ石器実測図は、表面・側面にのみ復元線を入れた。裏面に入れていないのは、欠損後の石器の形をよく理解するためである。
- 3 剥離のうち、調査中に欠損するなど、明らかに新しい剥離（欠損）に関しては、稜のみ固化し、リングを抜いている。
- 4 人為的と考えられる、微細剥離・磨面・ナレ面・凹面を持つ石器実測図中には、その範囲を「←————→」で表した。なお、微細剥離・磨面・ナレ面・凹面が明確でない場合は、「←………→」で表した。
- 5 4と関係し、磨石の磨面の範囲はうすいトーンで示した。石皿類のナレ面・凹面についても同様である。
- 6 今回の遺物整理の中で、石器全体の接合作業は行えていない。ただし、一部の石器について接合できたものは、図と図の間に「|————|」を示し、接合関係を表した。

観察表

- 1 表の内容は、左から、レイアウト番号である図No.、出土位置である層・グリッド・番号、器種、石器の計測値である長・幅・厚・重量、石材、備考の順になっている。
- 2 報告中では、石器個々の細かな出土位置については触れておらず、大まかな出土傾向の提示までとなっている。したがって、個々の石器の細かな出土位置については、表中の層・グリッド・番号を参照されたい。
- 3 器種名は一般的に用いられているものをそのまま使用した。器種分類が明確でない場合も多く、その点については備考中で触れている。
- 4 計測値は、現存部位での長・幅・厚・重量の最大値である。値の単位は、長・幅・厚は「cm」、重量は「g」である。重量の計測は、石皿類に体重計を使用したほかは、0.1gまで計測可能の電子秤を使用した。
- 5 石材名は、青山尚友氏（現在宮崎県総合博物館）の肉眼観察による分類をもとに、藤木が付与した。石材名は、6の略号を用いた。なお、自然科学的分析は一切行っていない。
- 6 石材名の略号 … Ob=黒色黒曜石（南九州系・西北九州系も一部含むか）、Ob1=白色黒曜石（大分県姫島産）、Ob2=青灰色黒曜石（西北九州系）、An=安山岩（大分県姫島産、香川県五色台ほか産、南九州系？）、Rh=流紋岩、Ch=チャート、K=珪岩、Sh=頁岩、KSh=珪質頁岩、Sl=シルト岩、KSl=珪質シルト岩、S=砂岩、Os=尾鈴山酸性岩、Q=水晶、Hl=ホルンフェルス
7. 備考には、石器の加工・欠損状況、推定石材産地などの特記事項を記した。したがって、本文中では石器個々について詳述することはせず、全体の傾向を示すことにとどめた。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過	(吉 本)	1
第2節 調査組織	タ	1

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡周辺の地形	(青 山)	3
第2節 周辺遺跡	(吉 本)	3
第3節 調査区の設定と微地形	(青 山)	5
第4節 遺跡の基本層序	タ	12

第Ⅲ章 繩文時代草創期・早期

第1節 遺構	(青 山)	16
1 土坑		
2 配石		
3 石器「埋納」遺構		
4 集石遺構		
5 散疊		
第2節 土器	(吉 本)	48
1 草創期の土器		
2 早期の土器		
第3節 石器	(藤 木)	160
第4節 小結		
1 遺構について	(青 山)	197
2 土器の特徴	(吉 本)	198
3 遺物の出土位置について	タ	200
第5節 集石遺構について	(青 山)	210

第Ⅳ章 自然科学的分析 224

第Ⅴ章 総 括

第1節 遺物からうかがえる遺跡の性格	(吉 本)	236
第2節 自然科学分析の結果	(青 山)	236

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

東九州自動車道の延岡～清武間は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成3年11月には西都～清武間が整備計画路線となっている。西都～清武間は平成5年11月に建設大臣から日本道路公団に施行命令が出され、道路公団は平成6年から事業に着手している。

その間、宮崎県教育委員会文化課では、平成3年度に西都～清武間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響を受ける部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。

宮崎県宮崎郡清武町大字船引字白ヶ野に所在する白ヶ野第2・第3遺跡は、前述の詳細分布調査の報告書では、「上の原・白ヶ野遺跡」とされ、縄文時代から中世に至る時代・時期の散布地とされた^①。このため、当初より「白ヶ野遺跡」という遺跡名で事業が進められたが、一方、例言でも触られているとおり、清武町教育委員会による詳細分布調査の報告書では、当該地の北側（宮崎市側）が白ヶ野第3遺跡、南側が白ヶ野第2遺跡となっている^②。既刊行の近隣遺跡の報告書では、この辺りの遺跡名に混乱が見られる^③。それは、小さな谷地形で区切られる部分があるとはいえ、実態としては台地上の連続する遺跡群であり、「線引き」が難しいことによるものと考えられる。ここでは、命名当初の遺跡名に立ち返り、白ヶ野第2・第3遺跡と称することにしたい。

本調査は平成7年度は平成7年6月7日から平成8年3月26日まで、平成8年度は平成8年4月10日から9月30までの間実施された。

（文献）

- 1 宮崎県教育委員会『東九州自動車道開通遺跡詳細分布調査報告書（西都～清武間）』1992
- 2 清武町教育委員会『清武町遺跡詳細分布調査報告書 清武町埋蔵文化財調査報告書4』1990
- 3 宮崎県教育委員会『上の原第3遺跡 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書13』1999
など。

第2節 調査組織

調査組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 田原 直廣

教育次長 八木 洋・中田 忠（平成7年度）

川崎 浩康・河野 聚（平成8年度）

文化課長 江崎 富治

課長補佐 田中 雅文（平成7年度）・稻田 繁男（平成8年度）

(平成7年度) 文化課が調査を実施

主幹兼埋蔵文化財第二係長 岩永 哲夫

埋蔵文化財第二係主査 園田 和宏(調査担当) 同主事 戸高真知子(調査担当)

調査員 白岩 修

(平成8年度) 埋蔵文化財センターが調査を実施

所 長 藤本 健一

副所長兼調査第一係長 岩永 哲夫

調査第一係主査 青山 尚友(調査担当) 同主査 日浅 雅道(調査担当)

調査員 井田 篤

遺物整理は、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

(平成13年度)

所 長 矢野 剛

副所長兼総務課長 菊地 茂仁

副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫

調査第一課長 面高 哲郎

総務課総務係長 亀井 維子

総務課主任主事 上野 広宣

調査第一課調査第一係長 谷口 武範

〃 主査 吉本 正典

〃 主事 藤木 聰

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡周辺の地形

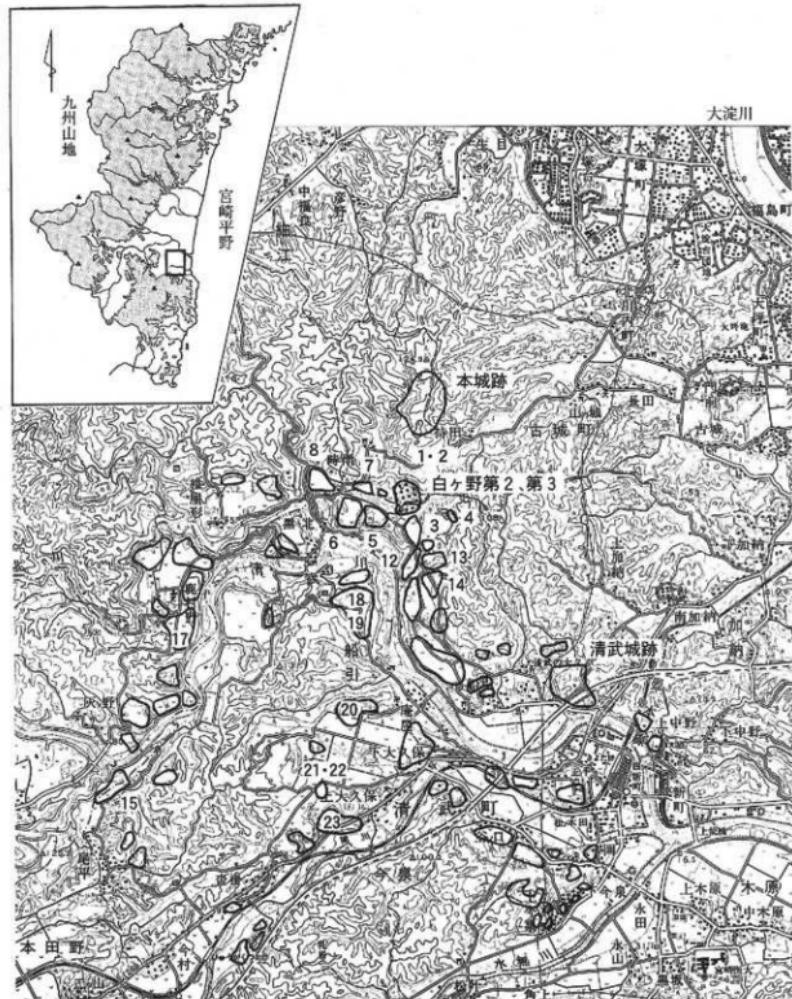
白ヶ野第2・第3遺跡周辺の地形は、高岡町西方の山地、田野盆地、宮崎市から清武町にかけて広がる沖積平野および丘陵、台地より構成される。高岡町西方の山地は、標高200~400mの丘陵状地形を呈し、急傾斜の谷が多く刻まれている。地質は四十万累層群とよばれる砂岩、頁岩、珪質頁岩、チャート、塩基性岩などから成る。田野盆地は清武川の上流に位置し、北の高岡山地と南の鰐塚山地に挟まれた凹地に周囲から砂礫が流れ込み、その上をシラスや火山灰層が覆って平坦な地形を形成している。宮崎市から清武町にかけて分布する丘陵および台地状の地形のうち大淀川より南の清武町から高岡町にかけての丘陵は大淀川南岸丘陵とよばれる。丘陵の高さは西方の高岡山地から東に向かってだいに低くなり標高約100mの平坦な台地状地形に変わる。本遺跡はこの台地状地形の上に立地する(第1図)。清武川より南の丘陵は清武川南岸丘陵とよばれ、清武町から田野盆地にかけて広がっている。

河川は大淀川と清武川が日向灘へ注いでいる。大淀川は都城盆地から宮崎平野へ東流する宮崎県内最大の一級河川である。途中で岩瀬川と本庄川の流れを加えて水量を増し、宮崎市に入ると蛇行をくり返しながら氾濫原を広げ、沖積平野を形成している。清武川は田野盆地から宮崎平野に流れる二級河川である。田野盆地から清武町にかけて川の両岸には段丘地形が顕著に発達している。この段丘地形は宮崎平野が第四紀洪積世に数次の隆起をくり返した結果形成されたものである。また清武川両岸の段丘崖には、礫が露出している。これは平衡状態にあった河川が地盤の隆起によって再び下刻浸食が活発となり河床面が下がった結果、旧河床や氾濫源に堆積した砂礫が崖にあらわれたものである。

第2節 周辺遺跡

白ヶ野第2・第3遺跡の周辺の丘陵、台地上には多くの遺跡があり、近年実施されるようになつた農業関連の基盤整備事業などにより、発掘調査が盛んに行われるようになってきている。特に立地条件から、縄文時代の遺跡の調査事例の多さが際立っており、草創期の隆帶文土器、爪形文土器を出土した宮崎市椎屋形遺跡A地区や、早期の炉穴が多数検出された椎屋形遺跡B地区¹⁾、中期から後期にかけての竪穴が多く確認された宮崎市と清武町にまたがる上の原第1遺跡、第2遺跡²⁾、田野町丸野第2遺跡³⁾などで重要な成果が得られている。

古墳時代以降に関しては、上の原第3遺跡で古墳時代中~後期の竪穴住居跡が10基確認されている⁴⁾ほか、尾平・橋原遺跡⁵⁾や椎原第1遺跡⁶⁾で古墳時代の竪穴住居跡が各1基検出されている。また、白ヶ野第3遺跡B地区⁷⁾では古代の竪穴住居が確認された。さらに、上の原第1遺跡では、祭祀に伴うと見られる「土器埋納遺構」が確認され、布留式甕を含む一括埋没資料が得られている。



- 図中の番号は、表1の遺跡番号と同じ
- 国土地理院発行5万分の1地形図「宮崎」使用

第1図 今回調査区の位置と周辺遺跡

それらの遺跡の位置関係については第1図および第2図を、調査された遺跡の概要については第1表を参照されたい。なお、表中の「遺構」と「遺物」の項の記述は、基本的には報告書の記載に従った。個々の報告書名の記載は略している。

(文献)

- 1 宮崎市教育委員会 「椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡」1996
- 2 宮崎県教育委員会 「上の原第2遺跡・上の原第1遺跡ほか 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査 報告書25』2000
- 3 田野町教育委員会 「九野第2遺跡 田野町文化財調査報告書11」1990
- 4 宮崎県教育委員会 「上の原第3遺跡 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書13」1999
- 5 宮崎県教育委員会 「尾平・櫛原遺跡・櫛原遺跡 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書8」1997
- 6 宮崎県教育委員会 「椎現原第1遺跡・下星野遺跡 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書47」2001
- 7 宮崎県教育委員会 「白ケ野第3遺跡B地区 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書25-2」2001

第3節 調査区の設定と微地形

調査地は南北約300m、東西50~80mにわたって広がるため、調査区を便宜上A~G区に分割した(第3図)。A・B・C区は調査地の北部、D・E区は中部、F・G区は南部に位置する。

発掘調査着手前は、この付近一帯は畠地として利用されており、C・E区の西側には微高地を削平してシラスが露出し、F区の東側には一段低い畠が広がっていた。またA・B区の北側は古城町から西へ伸びる谷地形に接し、G区の南側は清武川へ向かって谷地形が発達し、湧水が見られる。

第3図は調査区全体の地形をアカホヤ火山灰層直下面で復元したものである。ここで、北部、中部、南部に分けて地形の特徴を見てみる。

調査地北部は、C区の微高地からA・B・D・E区に向かって傾斜する。B区の平坦部との高差は約2mである。A区の西側では霧島小林軽石層堆積以後アカホヤ火山灰層までの地層が失われており、またB・C・D区では農用道路のため一部削平されているため、旧地形を完全に復元できなかった。中部は、C区の微高地から南と南東向きに高さ差2~3mで傾斜する。南部は、東向きと南東向きの谷地形が特徴的に見られる。東向きの谷地形はゆるやかに傾斜し、南東向きの谷地形は、水平距離40mで1m下がる狭い谷を形成している。調査区全体としては、南北距離約300mに対し6mの高差を持つ南に傾斜する。

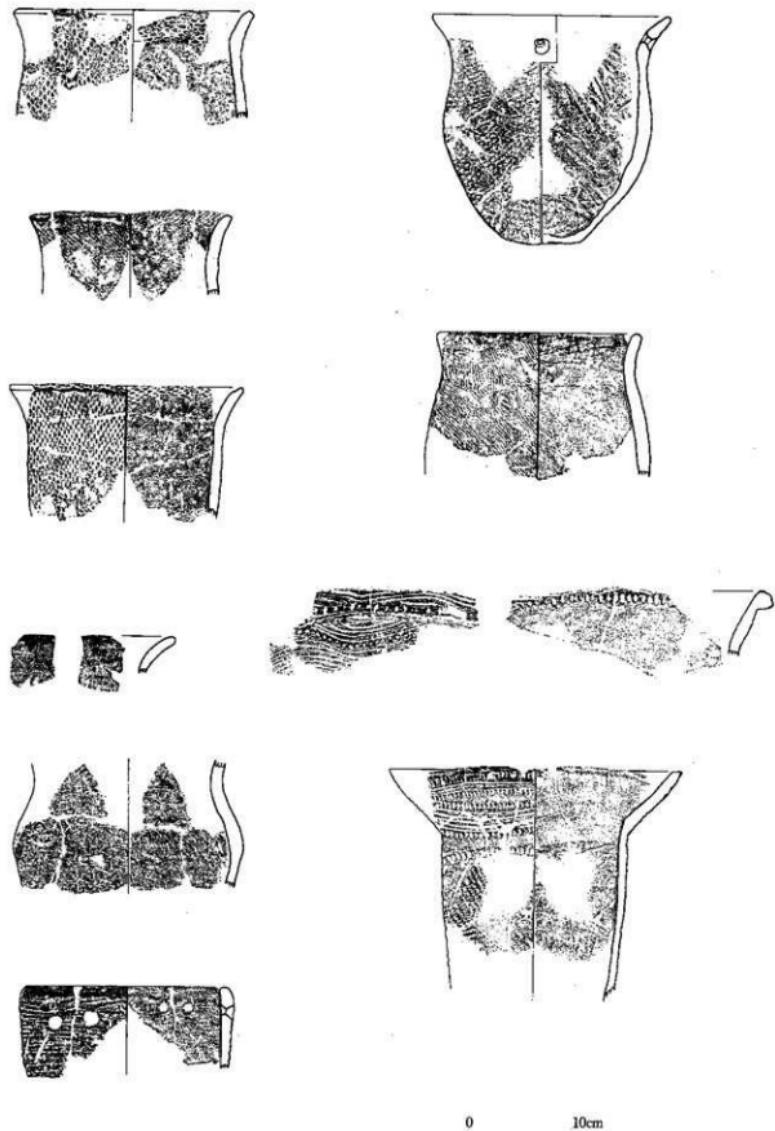
調査においては、国土座標第II系に軸線をあわせ、10mグリッドを組み、北から1・2・3…区、西からA・B・C…区とし、その組み合わせで区名を決めることとした。

発掘調査の結果、確実には縄文時代草創期から中世に至る各時代・時期の遺構・遺物が確認された。中でも、縄文時代早期の遺構(特に集石遺構)・遺物量が圧倒的に多い。

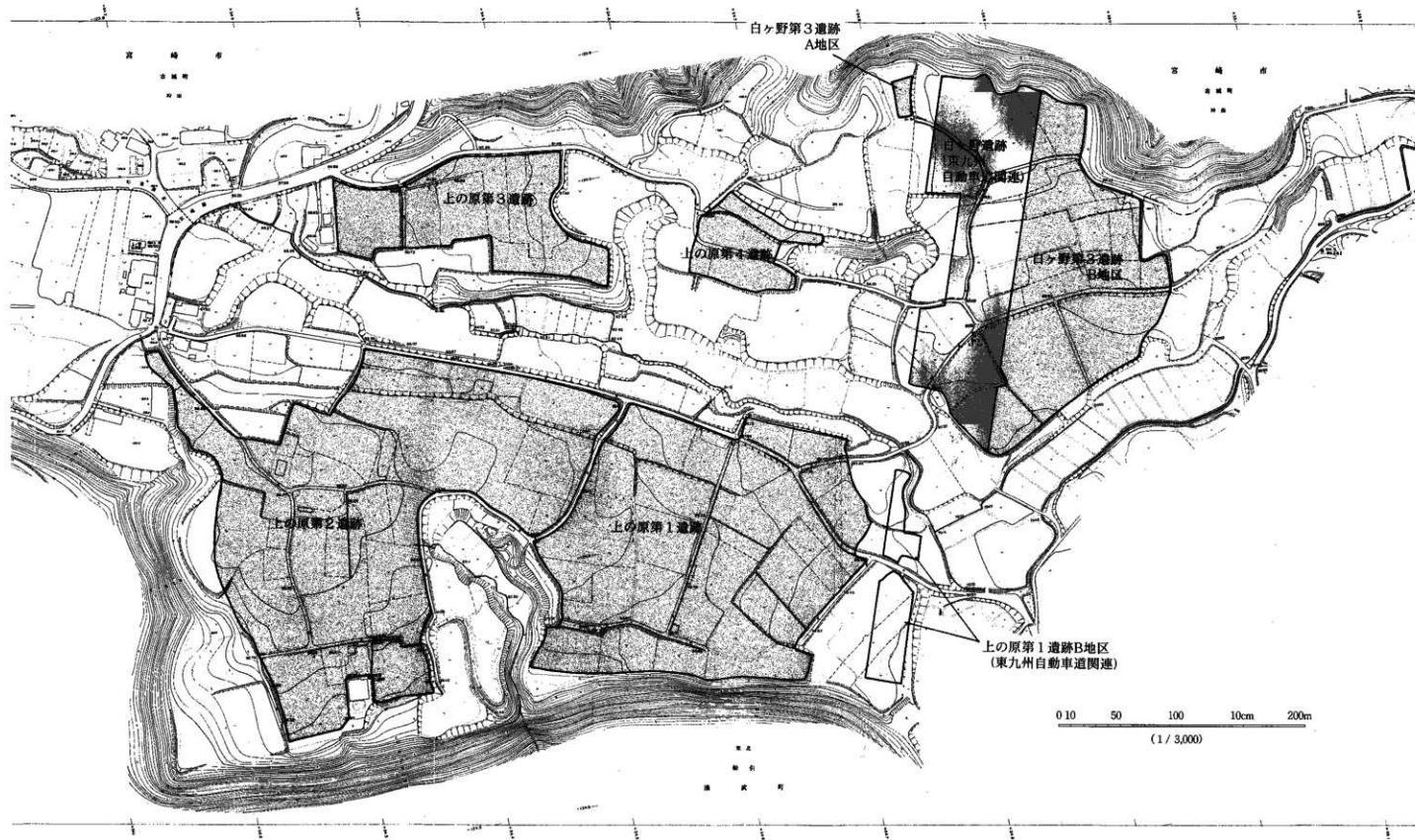
表1 周辺の主な既調査遺跡

	遺跡名	主体	所在地	時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	白ヶ野第2 (報告では白ヶ野第3 3段目B地区)	県	宮崎市大字綿江字時雨柳迫・清武町大字船引字白ヶ野	縄文早 縄文後・晚 古代	集石遺構11 竪穴住居跡(竪付き)	手向山式 丸尾式、孔列文土器、夜臼式、磨研土器等、布痕土器、内黒土陶器、土師壺坏、廢瓦鐵
2	白ヶ野第3	清武町	宮崎市大字綿江字時雨柳迫・清武町大字船引字白ヶ野	縄文早	集石遺構 9	下剣峰式、押型文系土器、手向山式、鶴糸文系土器、妙見・天道ヶ尾式、平括式、塞ノ神式(鶴糸文)、石鏡、石匙、異形石器、磨石
3	白ヶ野第1	清武町	清武町大字船引字白ヶ野	後期旧石器 縄文早 縄文前 縄文晚 時期不詳(Ah上)	集石遺構13 土坑107	スクレイパー 押型文系土器、手向山式 曾畠式 孔列文土器
4	白ヶ野第4	清武町	〃	縄文早	集石遺構 7、土坑 2	下剣峰式、押型文系土器、平括式、石鏡、石製姿身具、石匙
5	上の原第1	県	清武町大字船引上ノ原	縄文草創 縄文早 縄文前 字綿文中 縄文晚 弥生後 古墳前 中・近世	竪穴(住居跡)、土坑、炉 土坑 竪穴住居跡 6 土器埋納土坑 溝状遺構 4 道路状遺構 1	隆帶文土器? 前平式、押型文系土器、平括式 曾畠式 石組春日式(森木ヶ迫段階)、大平式、石劍、石皿、石錐 夜臼式、磨研土器 盆、甕、石包丁、砥石、石皿 壺、甕、(1点は布留式壺)、高坏、ミニチュア土器
6	上の原第2	県	清武町大字船引上ノ原	後期旧石器 縄文早 縄文中末~後中 近世	集石遺構45、蓆群 1 竪穴(住居跡)47、土坑66 配石土坑、道路状遺構、 掘立柱建物跡 8、土坑144	ナイフ形石器 中原I式、知覧式、手向山式、平括式、石鏡、石斧、凹石 指宿式、松ノ木式?、市米式、丸尾式、納曾式、幸川II式 石製姿身具、石皿、凹石、石鏡、石斧、石鎌
7	上の原第3	県	宮崎市大字綿江字時雨柳迫・清武町大字船引字白ヶ野	後期旧石器 縄文早 縄文後 古墳中~後 古代	蓆群 2、集石遺構 9 竪穴住居跡10	細刃刀 知覧式、押型文系土器、平括式 丸尾式? 須恵器、土師器、磨石、砥石、打製石斧、 鐵器 土師器坏
8	上の原	宮崎市	宮崎市大字綿江字時雨柳迫	後期旧石器(Kr-Kb下) 縄文草創 縄文早	集石遺構 3	ナイフ形石器、三稜尖頭器、石核、隆帶文土器 2、爪形文土器、8、本式? 前平式、桑ノ丸式、平括式、塞ノ神式、石鏡、尖頭器、凹石、磨石、石皿、台石
9	椎屋形A地区	宮崎市	宮崎市大字綿江字時雨柳迫	縄文草創 縄文早 縄文中 縄文後 弥生中末~後初	集石遺構 2 竪穴住居跡(花弁状)、掘立柱建物跡(持株柱)	隆帶文土器、爪形文土器、のみ型石器、敲石、局部磨製石斧、白石、磨石 中原I式併行、石鏡、石匙、石錐 中津式、磨製石鏡、磨石、石皿、台石、石包丁、铁鍬、鐵劍? 石製姿身具
10	椎屋形B地区	宮崎市	宮崎市大字綿江字時雨柳迫	縄文草創 縄文早	集石遺構69、連結土坑24 土坑21	隆帶文土器?、爪形文土器 前平式、知覧式、吉田式、中原I式併行、 押型文系土器 石鏡、尖頭器、磨石、敲石、 局部磨製石斧、横形石器
11	滑川第1	清武町	清武町大字船引字滑川	後期旧石器(Kr-Kb上) 縄文早 縄文前 縄文中 縄文後 時期不詳(Ah上) 後期旧石器(AT上) 後期旧石器(Kr-Kb下) 後期旧石器(Kr-Kb中)	土坑 6 (縄文早期か?) 集石遺構34 土坑178、竪穴住居跡 2 土坑16(高原スコリアを含む) 集石遺構(蓆群) 3 集石遺構(蓆群)	下剣峰式、押型文系土器、手向山式、塞ノ神式、局部磨製石斧、石鏡、石匙轟B式、 野口・阿多タイプ、曾畠式、石核(黒曜石) 鐵式、北久根山式 ナイフ形石器、ナイフ状剥片、チップ(黒曜石) 剥片(頁岩) 剥片(頁岩)
12	滑川第2	清武町	清武町大字船引字滑川	縄文早 縄文前 時期不詳(K-Ah上)	集石遺構43、土坑16 竪穴住居跡 1	下剣峰式、押型文系土器、手向山式、平括式(舟ノ原式)、塞ノ神式、轟A式、石鏡、石皿、磨石 野口・阿多タイプ
13	滑川第3	清武町	清武町大字船引字滑川	後期旧石器(AT上) 縄文早 縄文前	集石遺構36、竪穴 2、 8	剥片尖頭器、ナイフ形石器 土核系ノ丸式、押型文系土器、平括式 曾畠式

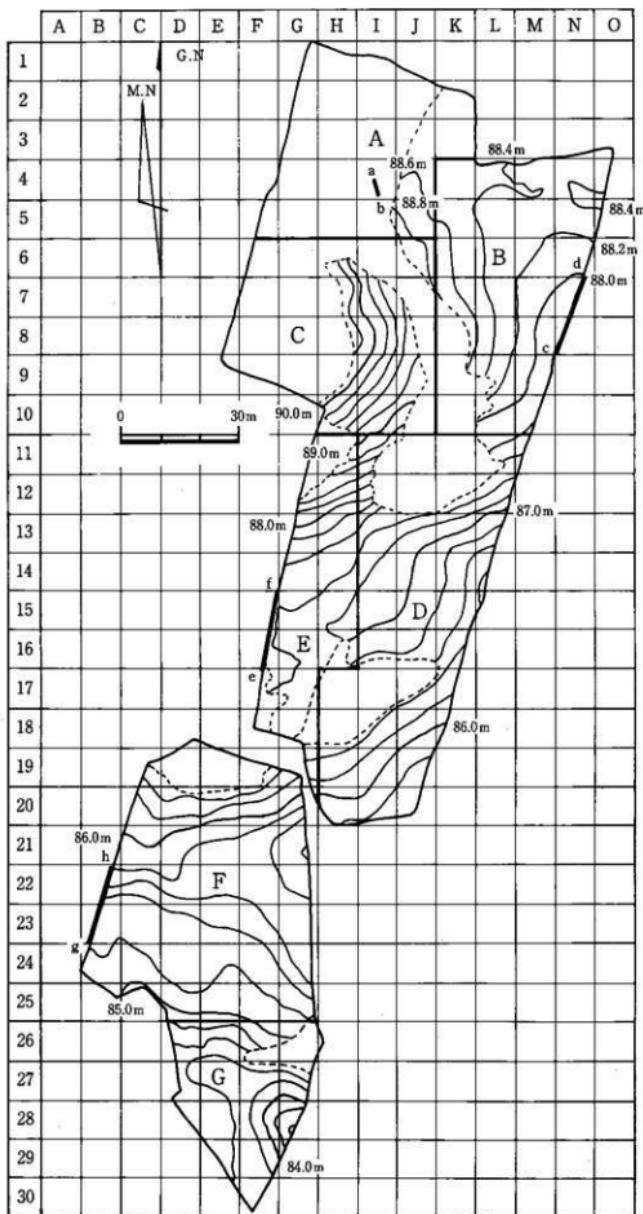
遺跡名	主体	所在地	時代・時期	主な遺構	主な遺物
14 横原	県	清武町大字船引 字横原	縄文早 縄文後 古代～中世	集石遺構5 竪穴住居跡1	手向山式土器、塞ノ神式、*石鐵 市来式系土器 土師器壊、布痕土器、斐形、白磁碗
15 ズクノ山第2	清武町	田野町甲 (鹿村野)	縄文早 縄文前 縄文中 縄文後	集石遺構65、配石遺構6	中原I式、知覧式、桑ノ丸式、手向山式、 押型文系土器、撫糸文系土器、石鐵、石槍、 石劍、磨石、局部磨研石斧 曾畠式 春日式(船元式) 沈縄文土器、磨消繩文土器(中津式)
16 前ノ原第2	清武町	田野町甲 (鹿村野)	縄文早 縄文後 古代	集石遺構27	岩本式?、前平式、中原I式、押型文系土器、 手向山式、平捨式、石鐵、石斧、縦斧 (or鑿) 土器 布痕土器
17 横現原第2	県	清武町大字船引 字横現原	縄文早	集石遺構8	中原I式併行、知覧式、押型文系土器、塞 ノ神式、桑ノ丸式、石鐵、菱石
18 横現原第1	県	清武町大字船引 字横現原	縄文早 縄文前 縄文後後半 弥生中 古墳後 古代	集石遺構8 竪穴住居跡2 竪穴住居跡1	中原I式併行、知覧式、押型文系土器 桑B式(みみずばれ状突帯)、周辺で曾畠式表 採 斐(磨研土器) 弦、斐 菱、斐 高坏 土師器壊、斐
19 杉木原	県	清武町大字今泉 字杉木原甲	後期山石器(Kr-Kb中) 縄文草創 縄文早	集石遺構42、階穴1、土 杭3	ナイフ形石器、スクレイパー、縄石刃、縄石 核 隆帶文土器2、爪形文土器1 岩本式、中原I式併行、知覧式、下剥峰式、 桑ノ丸式、押型文系土器、石鐵、磨石、凹 石、石皿、菱石
20 下星野A区	県	清武町大字今泉 字星野原	縄文早 縄文後 縄文晚 弥生中、古墳後 中・近世	集石遺構4 土杭1 集石遺構3 溝状遺構	前平式、桑ノ丸式、塞ノ神式、石鐵、スクレ イバー 市来式、丸尾式、磨消文土器 黒色磨研土器、条痕文土器 中厚式、二重口縁壹、高坏
21 下星野C区	県	清武町大字今泉 字星野原	後期旧石器 縄文早	集石遺構3、土杭3 集石遺構10、土杭3	縄石核、細石刃 岩本式?、前平式、平捨式、塞ノ神式、石 鐵
22 水ノ原	県	清武町大字船今 泉字水ノ原	後期旧石器 縄文早 縄文前 縄文後 弥生中末～後 時期不詳	集石遺構14 竪穴住居跡1 竪穴住居跡3 掘立柱 建物跡8	縄石核、細石刃 前平式、下剥峰式、塞ノ神式、石鐵、凹石、 砥石、石核 桑B式(みみずばれ) 沈縄文土器、条痕文土器 肥後系斐、ほか



挿図 白ヶ野第3遺跡B地区 出土遺物
 (『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書25』より)



第2図 遺跡周辺の地形



第3図 グリッドの配置と小地形

第4節 遺跡の基本層序

調査では、始良カルデラ起源の入戸火碎流堆積物（シラス）の上位において計15の層を確認した（第4図）。また、層は成さないものの霧島山と桜島火山を噴出源とするテフラを3つの層で検出した。以下、層別に説明する。

I 層 褐灰色土

表土（耕作土）である。乾燥すると灰色を呈し、ざらざらする。

II 層 褐灰色土

直径2～3mmのスコリアを含み、ざらざらする。

III 層 暗褐色土

細粒でしまりが弱い。炭化物粒を含んでいる。

IV 層 黒褐色土

細粒でしまりが弱い。縄文時代後期の遺物包含層。

V a層 にぶい黄褐色土

V b層よりも暗色を呈し、炭化物粒を含んでいる。縄文時代後期の遺物を包含する。

V b層 黄橙色火山灰

粘性は弱く、乾燥するとさらさらした「きなこ」状を呈し、火山ガラス質である。このテフラは約6300年前鬼界カルデラから噴出した「アカホヤ火山灰」の一次堆積層である。層最下部には直径2～3mmの同心円状の火山豆石を伴っている。V b層の直下には、緑黒色土がブロック状または薄い層状に堆積している。これは霧島山の古高千穂峰を噴出源とする「牛の脛火山灰」に相当するテフラと考えられる。

VI 層 黒色土

白色長石を斑点状に含み、かたくしまっている。炭化物粒を多く含む。乾燥すると一辺1～2cmの細かな方形クラックが発達する。縄文時代早期の土器、石器、礫を包含する。

VII 層 黒褐色土

白色の長石を斑点状に含み、かたくしまっている。層全体に明暗のまだら模様を有し、炭化物粒を含む。縄文時代早期の土器、石器、礫を包含する。

VII層とVIII層の間には淡黄白の火山灰がレンズ状に堆積している。これは桜島火山を噴出源とする「桜島末吉」（p.11、桜島嫁坂）に相当するテフラであると考えられる。

VIII 層 黄褐色土

円または梢円形をした明黄褐色土をまだら状に含み、ややかたくしまっている。層全体に直径5mm以下の橙色軽石が散在する。VIII層の中ほどには暗橙色を帯びた細粒土が親指大塊状に点在する。これは約1.1万年前に桜島から噴出した「桜島薩摩」（p.14）に相当するテフラと考えられる。

IX a層 暗褐色土

橙色軽石、青色岩片、白色長石の混じった塊状ブロックを含み、かたくしまっている。

IX b層 にぶい黄褐色火山灰

橙色軽石、青色岩片、白色長石を砂状に含み、かたくしまっている。

このテフラは霧島山の韓国岳を噴出源とする「霧島小林軽石」に相当し、噴出時代は約1.5万年前と考えられている。

X 層 褐色土

橙色軽石を散点状に含み、ややかたくしまっている。

Xla 層 明黄褐色土

直径1~3cmの淡黄褐色土をまだら状に含み、しまりはやや弱い。

Xlb 層 淡黄色火山灰

軽石や岩片を含み火山ガラス質である。このテフラは姶良カルデラから約2.4~2.5万年前噴出した姶良Tn火山灰(AT)に相当する。

XII 層 黄灰色火山灰

南九州で「シラス」とよばれている姶良カルデラから噴出した火碎流本体から成る。軽石や岩片を含み火山ガラス質である。「シラス」は基盤岩の砂岩・泥岩互層を覆って厚く堆積している。

土層断面図はA・B・E・F区の4か所で作成した(第3図)。A区の南北方向断面は第5図に、B・E・F区の南北方向断面は第6図に示している。

A区のa-b断面は標準土層とは異なり、上からⅢ層(古代の遺物を包含する)、にぶい黄褐色土層、黒褐色土層、褐色土層(a層とする)、アカホヤ火山灰二次堆積層(b層とする)の各層が確認された。にぶい黄褐色土、黒褐色土、褐色土はシルト質で粘質を帯びている。黒褐色土層および褐色土層からは集石遺構が検出された。アカホヤ火山灰二次堆積層は、上部の明黄褐色シルト質層と下部の黄褐色シルト質層から成る。地層は火山豆石を混入しアカホヤ火山灰層に比べ暗色を呈する。

B区のc-d断面は霧島小林軽石層から上の標準土層を観察することができる。アカホヤ火山灰層には縦方向の浸食痕が発達しており、樹根跡が多く見られる。アカホヤ火山灰層の直下には霧島火山から噴出した「牛の脛」テフラが薄く堆積しているが、c-d断面には表示していない。

「桜島末吉(p.11)」はVI層とVII層の境に厚さ約10cmのレンズ状堆積をしていることが確認された。桜島末吉はG区でも確認されたが、層を成すほどの厚さと広がりはなく、凹地に堆積した一部が残されたものと思われる。

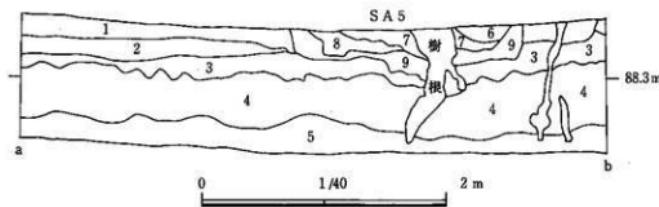
E区のe-f断面は霧島小林軽石層からアカホヤ火山灰層二次堆積層までの土層を示している。耕作による削平によってアカホヤ火山灰層の厚さは南へ向かってしだいに薄くなり消滅する。「牛の脣」テフラはアカホヤ火山灰層最下部と一部混合しながらブロック状又はレンズ状に堆積している。

F区のg-h断面はE区と同様にアカホヤ火山灰層から霧島小林軽石層までの土層を示している。土層は南へ傾斜した地形に沿って堆積している。

アカホヤ火山灰層の最下部には火山豆石と粗粒の橙色軽石を含んでおり、火山灰の降下堆積を確認する証拠になっている。アカホヤ火山灰の厚い堆積によって原地形の谷部は埋められて起伏の少ない地形を形成している。縄文時代早期の生活面はやや起伏を帯びた地形条件のもとに存在したことがうかがえる。



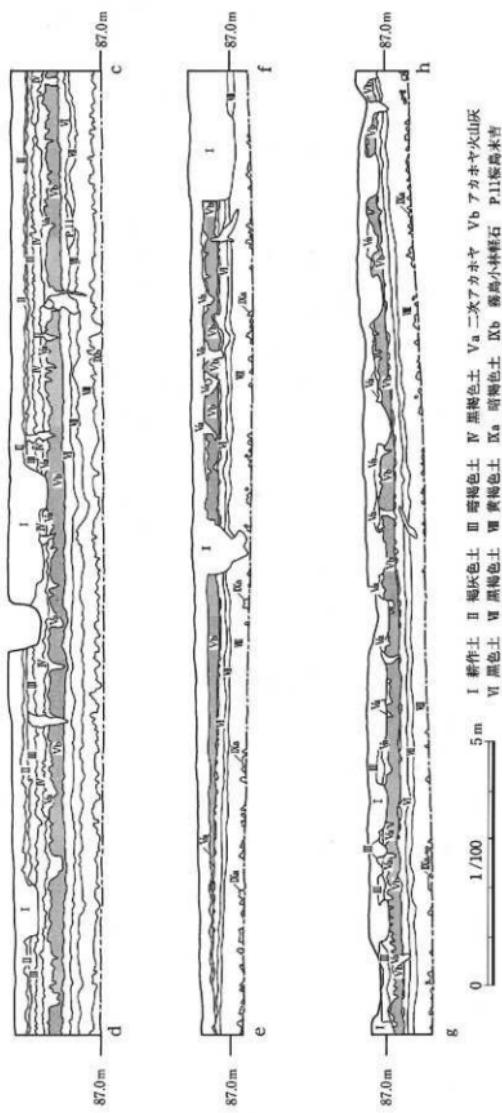
第4図 基本層序模式図



- | | | |
|----------------------|------------------|-----------------|
| 1 褐色土 (a層に相当) | 2 黄褐色土 (b層に相当) | 3 褐色土 |
| 4 黑褐色土 (シルト質、弱い粘性あり) | 5 にぶい黄褐色土 (粘性あり) | 6 黑褐色土 |
| 7 暗黄褐色土 | 8 暗黄褐色土 (二次アカホヤ) | 9 暗褐色土 (二次アカホヤ) |

第5図 A区土層図

第6図 B・E・F区土層図



第Ⅲ章 縄文時代の草創期・早期

第1節 遺構

1 土坑

土坑はG区のⅣ層中で3基検出された（第7図）。いずれも遺物を含まないため、細かな時期は不明である。

1号土坑

平面形は直径0.60mの円形を成す。底面までの深さは0.15mである。床面は東側がやや低い。覆土はにぶい黄褐色土と褐色土から成り、炭化物粒を含んでいる。

2号土坑

平面形は長軸0.80m、短軸0.70mの橢円形を呈し、底面までの深さは0.20mを測る。覆土は黒褐色、暗褐色、灰黄色を呈する。

3号土坑

平面形は長軸1.0m、短軸0.85mの橢円形となる。底面までの深さは0.35m。覆土は黒褐色、暗褐色、にぶい黄褐色、褐色を呈する。

2 配石遺構

配石はA区のVI層中で検出された（第8図）。遺構は長径90cm×短径80cmの円形皿状をした浅い掘り込みをもつ。礫は2個とも砂岩から成り、東西方向に配されている。礫の大きさは20×20cm、15×20cmで角礫が用いられている。表面には加工痕や被熱の痕跡は認められない。

3 石器埋納遺構

「石器埋納遺構」と称するものは、A区西側の暗褐色を帯びたアカホヤ火山灰二次堆積層中で検出された（第8図）。A区西側ではアカホヤ火山灰層が連続せず、霧島小林輕石層の上に黒褐色、粘質の暗褐色土の順に堆積している。黒褐色土から集石遺構が検出されている。

石器は3点とも磨石である。磨石の岩質は県央の尾鈴山産の溶結凝灰岩からなり、大きさは拳大である。磨石のうち1個の側縁部には敲打痕が認められる。3個の磨石は長軸を平行にして、30×40cmの橢円形をしたやや深い掘り込みの中に1～2cmの隙間をおいて並べられている。第8図の下3点がそれである。

4 集石遺構

集石遺構は計96基検出された。そのほとんどが縄文時代早期に属するものと考えられるが、Ⅳ層検出の集石遺構の一部については、草創期に属する可能性もある。

なお、時間的制約もあり、それらの全てについて図面を作成することができなかつた。個々の詳細については、第2表の測定・観察一覧表を参照されたい。

地区別では、A区に16基、B区に41基、C区に29基、D区に2基、F区に5基、G区に3基分布しており、90%は調査区の北部に集中している。なお、B区の2基については大雨による崖面崩壊の恐れがあったため緊急埋めもどしを行った。

検出層別ではVI層から35基、VII層から48基、VIII層から6基となっており、検出層が捉えられなかったものが7基あった。

V層で検出された集石遺構は北部の平坦部に多く分布していた（第9図）。掘り込みのある集石遺構は総数11基で、A区より3基、B区より6基、C・D区より各1基検出されている。碟の広がりは概ね円形を呈し、平均長径115cm、平均短径96cmである。1基の碟総数は41～353個で平均は160個である。また2基は敷石を有していた。掘り込みのないものは総数24基で、A区から10基、B区から7基、C区から5基、G区から2基検出されている。やや楕円形を成す碟の広がりを示し、平均長径115cm、平均短径83cm、平均碟数は81個である。

VII層で検出された集石遺構はC区の東側斜面とB区に集中して分布する傾向を示している（第10図）。掘り込みのあるものは総数25基で、A区より1基、B区より10基、C区より12基、F区より2基検出されている。平均長径109cm、平均短径92cmの円形を呈し、平均碟数は232個である。掘り込みのないものは総数23基で、A区より3基、B区より11基、C区より5基、F区より3基、G区より1基検出された。平均長径97cm、平均短径71cm、平均碟数は76個。

VIII層で検出された集石遺構は計6基である（第11図）。そのうち、掘り込みのある4基は、B区より1基、C区より3基検出されており、平均長径118cm、平均短径94cm、平均碟数500個である。掘り込みの深さはVI層、VII層で検出した集石遺構と比較して深く、内部には多数の碟が含まれている。掘り込みのない2基は、C区より1基、D区より1基検出され、平均長径65cm、平均短径60cm、平均碟数は28個である。

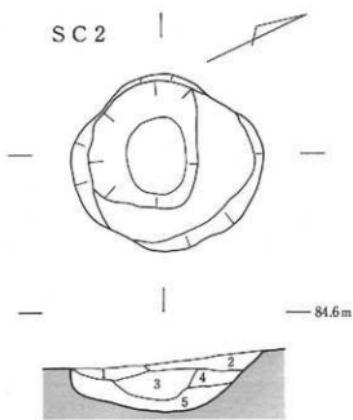
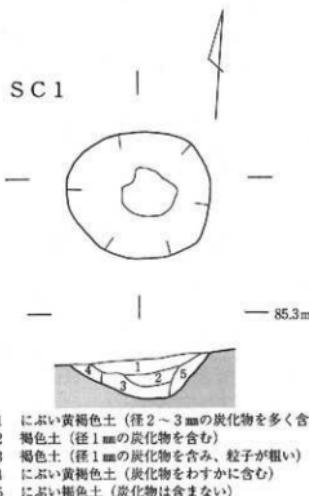
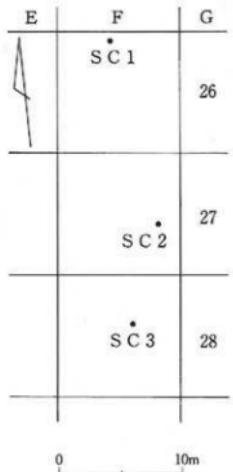
5 散碟

1号・2号散碟はVII層中より検出された。

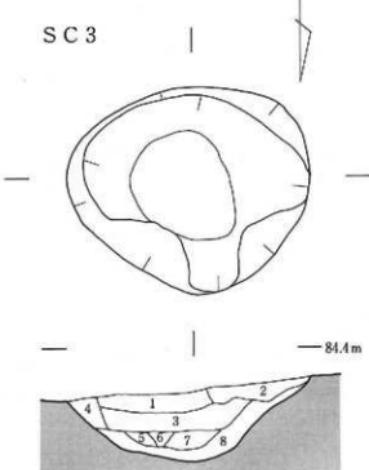
1号散碟はC区東側に位置する。碟は 5.5×3.5 mの範囲に1553個が分布し、中央付近はやや密なものとして一様な碟分布を示した。碟群の下に集石遺構は存在しなかった。碟の大きさは中碟が圧倒的に多く、主に角碟から構成される。

2号散碟はG区の南端で検出された。碟は 3.0×6.5 mの範囲に181個が散在していた。碟の大きさは大碟と中碟が半々である。

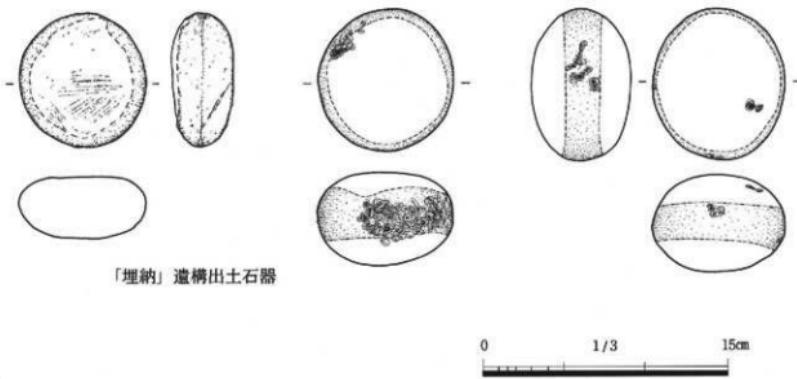
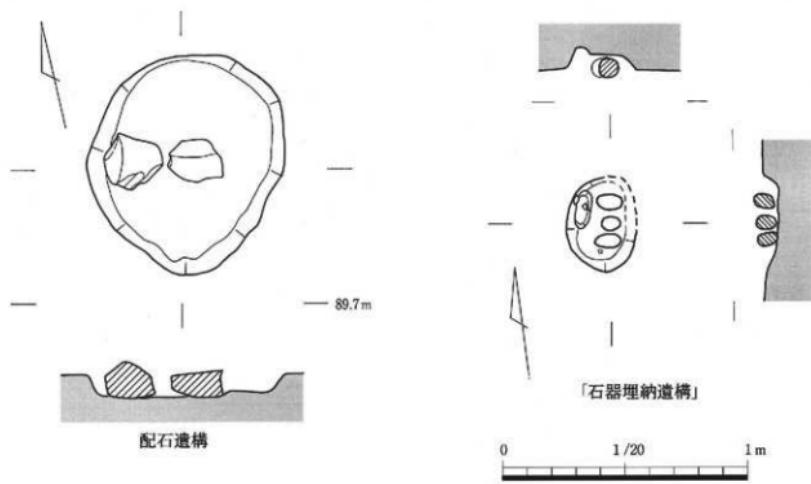
3号・4号散碟は検出層不明。3号散碟はB区の南側に位置する。碟は 2.0×3.0 mの範囲に115個が散在し、中碟主体の亜角と角碟から成る。4号散碟はC区中央に位置する。碟は 1.5×2.7 mの範囲に185個が散在し、角碟主体の大碟と中碟から成る。



0 1/20 1m



第7図 土 坑



第8図

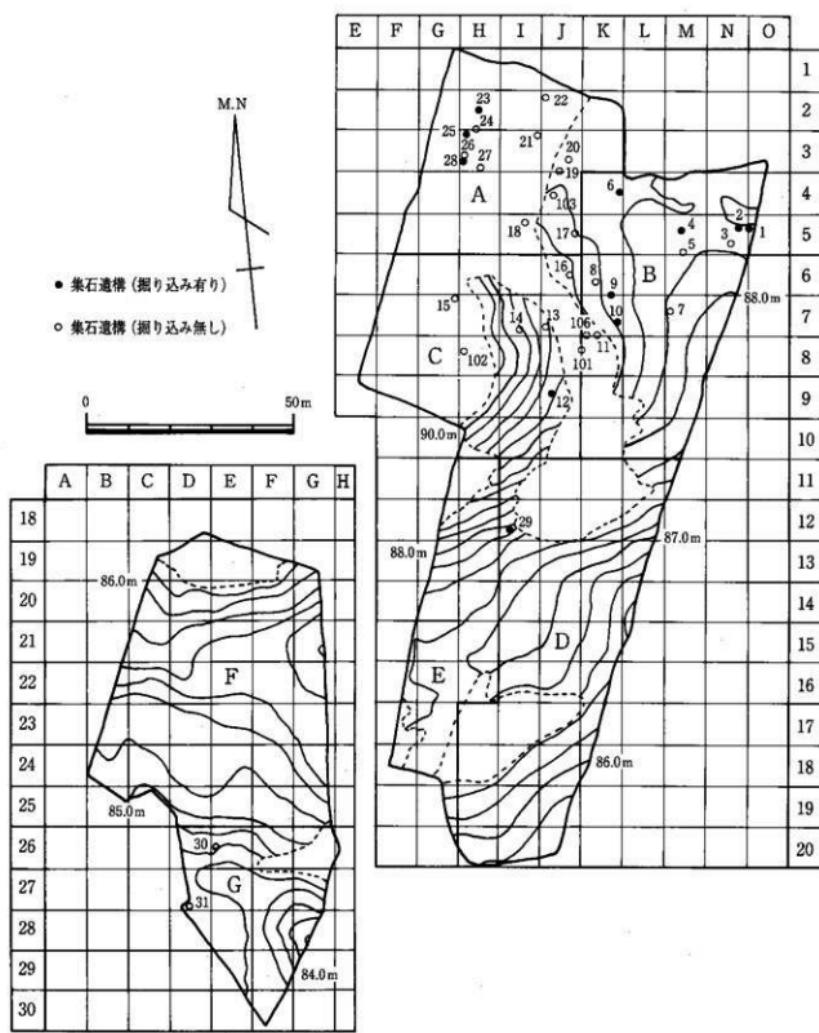
VI層	番号	层面	長径 (m)	短径 (m)	標数	標岩	石核は細粒			尾状岩			巨砾			大砾			中砾			円			亜円			角			炭化物			土器			石材			散石				
							粗粒 砂岩	中粒 砂岩	細粒 砂岩	尾状岩	シルト岩	泥灰岩	尾状岩																															
①掘り込み有り	1	○	0.70	0.60	41	0	1	0	40	0	0	0	0	0	0	40	1	8	10	15	8	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	2	○	1.20	1.00	273	0	0	6	264	0	3	0	0	0	0	248	25	7	61	120	85	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	4	○	1.10	0.80	116	0	0	0	116	0	0	0	0	0	0	54	62	4	19	68	25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	6	○	1.20	1.10	110	0	0	0	110	0	0	0	0	0	0	43	67	2	7	21	80	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	9	○	1.10	1.00	157	0	2	10	144	0	0	1	0	104	53	3	14	71	69	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	10	○	0.80	0.60	49	0	1	3	45	0	0	0	0	40	9	1	11	20	17	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	12	○	1.00	0.95	90	0	0	3	87	0	0	0	0	67	23	0	9	39	42	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	23	×	1.40	1.10	353	0	0	0	351	0	1	1	1	200	153	3	43	110	197	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	25	○	1.30	1.10	177	0	0	0	176	0	1	0	0	77	100	2	12	135	28	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
②掘り込み不明瞭	28	×	1.30	0.90	40	0	0	0	38	0	2	0	0	11	29	3	4	9	24	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	29	○	1.50	1.40	350	0	1	1	342	0	6	0	0	133	217	5	22	137	186	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
	3	○	0.70	0.50	41	0	0	0	3	87	0	3	0	0	0	5	36	0	0	0	41	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	5	○	1.70	1.50	44	0	1	0	43	0	0	0	0	2	42	0	8	28	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	7	○	0.80	0.70	29	0	0	0	29	0	0	0	0	0	18	11	0	4	0	25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	8	○	0.50	0.40	51	0	0	0	50	0	1	0	0	0	35	16	3	1	21	26	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	11	×	1.25	0.45	24	0	0	0	23	0	1	0	0	0	17	7	0	2	14	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	13	×	1.20	1.00	46	0	1	1	43	0	1	0	0	0	25	21	1	4	16	25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	14	×	1.40	1.30	52	0	0	3	49	0	0	0	0	0	36	16	2	7	16	27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
③掘り込み不明瞭	15	×	0.75	0.50	22	0	0	2	20	0	0	0	0	0	17	5	2	7	7	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	16	○	1.30	0.70	43	0	0	0	43	0	0	0	0	0	21	22	1	8	12	22	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	17	×	1.20	0.60	108	0	0	0	106	0	2	0	0	1	78	29	4	12	32	60	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	18	×	0.90	0.80	138	0	0	0	137	0	1	0	0	0	90	57	3	14	44	14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	19	×	1.10	1.00	46	0	0	0	46	0	0	0	0	0	21	25	6	5	30	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	20	×	2.00	1.30	232	0	0	0	227	5	0	0	0	0	61	171	12	28	149	43	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	21	×	0.70	0.60	56	0	0	0	56	0	0	0	0	0	17	39	8	10	23	15	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	22	○	0.90	0.60	65	0	0	0	65	0	0	0	0	0	41	24	4	3	14	44	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	24	○	1.00	0.80	69	0	0	0	66	0	3	0	0	0	22	47	3	8	50	53	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
④掘り込み不明瞭	26	○	0.90	0.75	86	0	0	0	85	0	1	0	0	0	25	61	1	3	26	56	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	27	○	0.70	0.60	56	0	0	1	53	2	0	0	0	0	36	20	3	2	20	31	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	30	×	1.20	0.50	185	0	0	3	179	0	3	0	0	0	40	145	3	20	39	123	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	31	○	1.90	1.80	345	0	0	0	342	0	3	0	0	0	50	295	1	20	94	230	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	101	×	2.40	1.60	97	0	0	1	95	0	1	0	0	0	26	71	1	3	24	69	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	102	×	0.50	0.40	19	0	0	2	17	0	0	0	0	0	12	7	0	2	8	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	103	×	-	-	32	0	0	1	31	0	0	0	0	0	18	14	1	4	12	15	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	106	×	1.50	0.70	47	0	0	1	45	0	1	0	0	0	26	21	0	3	18	26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			

留層	番号	面番	長辺 (m)	短辺 (m)	屢数 個	断面 幅	粗粒 砂岩	細粒 砂岩	中粒 砂岩	細粒 泥岩	シル 泥灰岩	尾端 泥灰岩	底端 泥灰岩	大標 柱	中標 柱	円 柱	亜円 柱	角 柱	炭化物	土器	石器	石材	鐵石	赤鉄礦
③埋り込 み有り	33	○	0.65	0.60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	-
	37	×	1.60	1.00	308	0	0	1	304	1	2	0	0	115	193	9	16	164	119	×	○	×	×	○
	38	○	1.40	1.20	208	0	2	5	200	0	1	0	0	125	83	1	23	65	119	○	○	○	○	○
	39	○	1.00	1.00	173	0	2	8	162	0	1	0	0	126	47	0	12	69	92	○	○	○	○	○
	40	○	1.60	1.20	293	1	3	5	284	0	0	0	0	141	152	6	15	122	150	○	○	○	○	○
	42	○	1.10	0.80	168	0	0	0	164	0	1	0	0	78	90	1	11	45	111	○	○	○	○	○
	47	○	1.10	1.00	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	
	48	○	0.35	0.30	21	0	1	0	20	0	0	0	0	18	3	0	0	7	14	○	○	○	○	○
	49	○	0.65	0.65	18	0	0	1	16	0	1	0	0	8	10	0	2	7	9	○	○	○	○	×
	50	○	1.00	0.90	135	0	2	2	131	0	0	0	0	63	72	4	12	32	87	○	○	○	○	○
	52	×	1.60	1.30	281	0	0	1	278	0	2	0	0	152	129	6	24	188	63	×	○	○	○	○
	57	○	0.80	0.75	64	0	0	3	61	0	0	0	0	17	47	0	3	21	40	×	○	○	○	○
	58	○	1.80	1.30	309	0	0	4	305	0	0	0	0	149	160	12	77	92	128	○	○	○	○	ch2
	59	○	0.90	0.80	166	1	0	6	158	0	1	0	0	103	63	5	14	71	76	○	○	○	○	×
	60	○	1.00	0.90	100	0	2	1	96	0	1	0	0	49	51	2	10	45	43	○	○	○	○	ob1
	61	○	0.70	0.60	50	0	0	0	48	0	1	1	0	34	16	1	4	20	25	○	○	○	○	○
	62	○	1.00	0.80	123	0	0	0	122	1	0	0	0	60	63	0	4	42	77	×	○	○	○	○
	64	○	1.20	1.10	194	0	0	4	186	0	3	1	0	54	140	0	6	50	138	○	○	○	○	ob5
	65	×	1.10	0.70	96	0	0	0	96	0	0	0	0	31	65	2	12	17	65	○	○	○	○	×
	67	×	1.00	0.90	470	0	0	0	468	0	1	1	0	144	326	6	28	91	345	○	○	○	○	ob1
	68	○	1.00	0.95	170	0	0	0	167	1	2	0	0	125	45	15	43	79	33	×	○	○	○	○
	69	○	1.50	1.50	932	3	9	21	898	0	1	0	0	599	333	3	37	533	533	○	○	○	○	○
	71	○	1.20	1.10	177	1	1	4	169	0	2	0	0	77	100	2	17	49	109	○	○	○	○	○
	74	○	1.20	1.10	429	0	1	4	421	0	3	0	0	293	136	16	34	138	241	○	○	○	○	×
	78	×	0.90	0.65	453	0	0	3	450	0	0	0	0	146	305	10	30	94	319	○	○	○	○	×
④埋り込 み不明瞭	32	○	0.40	0.30	14	0	0	2	12	0	0	0	0	6	8	0	2	3	9	×	○	○	○	○
	34	○	0.60	0.50	47	0	1	2	43	0	0	1	0	18	29	1	4	20	22	○	○	○	○	×
	35	○	0.60	0.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	×	○	○	○	○
	36	○	0.60	0.35	24	0	0	5	19	0	0	0	0	19	5	1	2	8	13	×	○	○	○	○
	41	○	0.90	0.90	105	0	0	7	97	0	0	1	0	37	68	1	4	27	73	○	○	○	○	×
	43	○	0.70	0.40	29	0	0	0	29	0	0	0	0	4	25	3	4	8	14	○	○	○	○	×
	44	○	0.80	0.60	49	0	2	6	40	0	1	0	0	43	6	0	3	20	26	○	○	○	○	×
	45	○	0.50	0.50	22	0	1	1	20	0	0	0	0	20	2	0	2	13	7	×	○	○	○	○
	46	○	1.20	1.00	37	0	2	1	34	0	0	0	0	28	9	1	20	7	9	○	○	○	○	×
	51	○	2.40	1.90	180	0	1	0	179	0	0	0	0	74	106	1	24	83	72	○	○	○	○	×
	53	×	0.80	0.80	187	0	0	0	183	0	4	0	0	45	142	1	13	40	133	×	○	○	○	ob1
	54	×	0.70	0.60	37	0	0	0	35	0	2	0	0	21	16	1	6	12	18	×	○	○	○	○

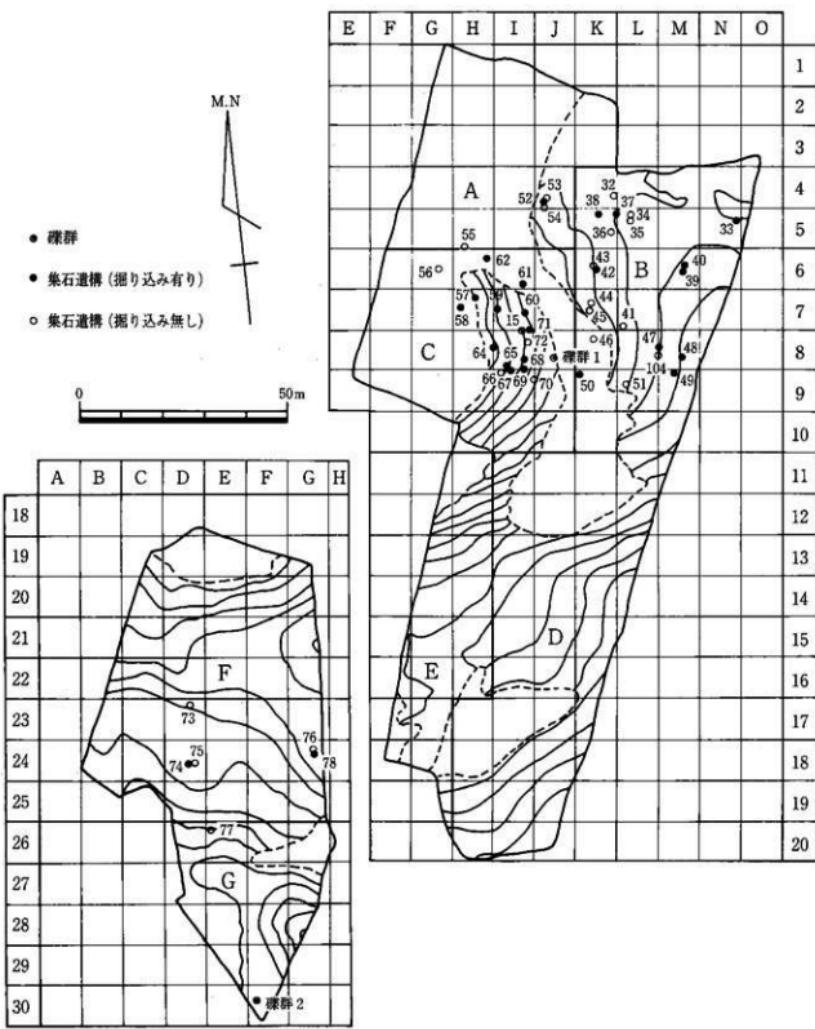
層層	番号	面面	長径 (m)	短径 (m)	縦数 個	縦 幅	縦 幅	粗粒 砂岩	中粒 砂岩	細粒 砂岩	繊維 砂岩	尾 端	尾 端	尾 端	尾 端	大繊 維	中繊 維	大繊 維	中繊 維	内 円	亜円 角	角	炭化物	土器	石材	敷石	赤変礫
③纏り込 み有り	55	○	0.90	0.70	49	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	27	1	3	40	5	×	○	×	ch1	×	○
	56	×	1.00	0.70	26	0	0	2	24	0	0	0	0	0	0	8	18	0	2	4	20	○	○	×	×	○	○
	63	○	0.90	0.40	54	1	0	5	48	0	0	0	0	0	0	41	13	0	3	21	30	×	○	×	×	○	○
	66	×	1.00	0.70	118	0	0	0	118	0	0	0	0	0	0	63	55	2	19	22	75	○	○	×	×	○	○
	70	×	2.00	2.00	235	0	1	1	232	0	1	0	0	0	0	124	111	6	20	78	131	○	○	×	ch2b1	×	○
	72	○	0.50	0.30	28	0	0	3	25	0	0	0	0	0	0	19	9	0	1	14	13	×	○	×	×	○	○
	73	×	1.00	0.80	174	0	0	0	173	0	1	0	0	0	0	67	107	9	22	75	68	○	○	×	ch1	×	○
	75	×	0.90	0.70	83	0	1	2	77	0	3	0	0	0	0	26	57	2	4	24	53	○	○	×	×	○	○
	76	×	1.80	1.10	128	0	1	0	126	0	1	0	0	0	0	53	75	1	9	25	93	○	○	×	ob1	×	○
	77	×	1.10	0.30	29	0	0	2	27	0	0	0	0	0	0	11	18	0	0	7	22	○	○	×	×	○	○
	104	○	0.95	0.60	27	0	3	0	24	0	0	0	0	0	0	8	19	0	5	6	16	○	○	×	×	○	○
織群1	×	5.50	3.50	1553	0	0	8	1536	4	5	0	0	0	0	258	1295	15	79	244	125	○	○	×	×	○	○	
織群2	×	6.50	3.00	181	0	1	3	176	0	1	0	0	0	0	95	86	3	9	73	96	○	○	○	ch3	×	○	

層層	番号	面面	長径 (m)	短径 (m)	縦数 個	縦 幅	縦 幅	粗粒 砂岩	中粒 砂岩	細粒 砂岩	繊維 砂岩	尾 端	尾 端	尾 端	尾 端	大繊 維	中繊 維	大繊 維	中繊 維	内 円	亜円 角	角	炭化物	土器	石材	敷石	赤変礫
⑤纏り込 み有り	79	○	1.00	0.90	308	0	0	7	298	0	3	0	0	0	0	113	195	1	50	131	126	○	○	×	×	○	○
	81	○	1.00	0.80	267	0	1	4	45	0	0	0	0	0	0	467	220	7	5	45	210	○	○	×	×	○	○
	82	×	1.40	0.80	943	0	2	2	939	0	0	0	0	0	0	463	481	8	70	180	685	○	○	×	cb2	×	○
	83	×	1.30	1.20	481	0	0	3	476	0	2	0	0	0	0	354	127	6	62	193	220	○	○	×	×	○	○
⑥纏り込 み不明瞭	80	×	0.60	0.60	15	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	10	5	0	0	4	11	×	×	×	×	○	○
	84	○	0.70	0.60	40	0	0	0	36	0	4	0	0	0	0	22	18	2	4	6	28	×	×	×	×	○	-

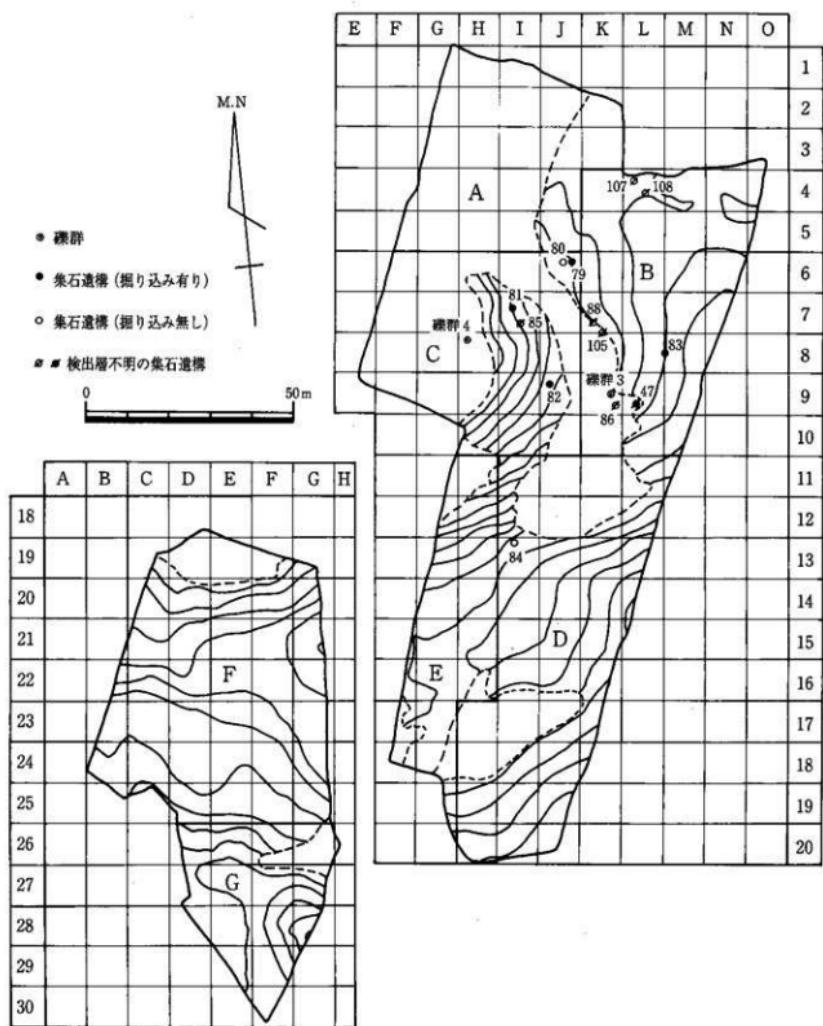
層不明	番号	面面	長径 (m)	短径 (m)	縦数 個	縦 幅	縦 幅	粗粒 砂岩	中粒 砂岩	細粒 砂岩	繊維 砂岩	尾 端	尾 端	尾 端	尾 端	大繊 維	中繊 維	大繊 維	中繊 維	内 円	亜円 角	角	炭化物	土器	石材	敷石	赤変礫
⑦纏り込 み有り	87	○	1.35	0.70	70	0	0	4	66	0	0	0	0	0	0	31	39	1	10	33	26	○	×	×	×	○	○
	85	×	1.10	1.00	42	0	0	0	42	0	0	0	0	0	0	10	32	0	0	11	31	○	○	×	×	○	○
⑧纏り込 み不明瞭	86	×	0.80	0.60	19	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	8	11	0	0	9	10	○	○	×	×	○	○
	88	×	1.50	1.20	35	0	0	1	32	0	1	1	0	0	0	20	15	6	10	9	6	○	○	○	○	○	○
	105	×	1.30	1.10	44	1	0	1	41	0	1	0	0	0	0	29	15	5	5	17	17	○	○	×	×	○	○
織群3	×	3.00	2.00	115	0	0	1	113	0	1	0	0	0	0	44	71	2	6	35	72	○	○	×	ob1	×	○	
織群4	×	2.70	1.50	185	0	0	5	178	0	2	0	0	0	0	87	98	1	7	39	138	○	○	×	×	○	○	
⑨その他	107	○	0.60	0.40																							
	108	○	0.80	0.70																							



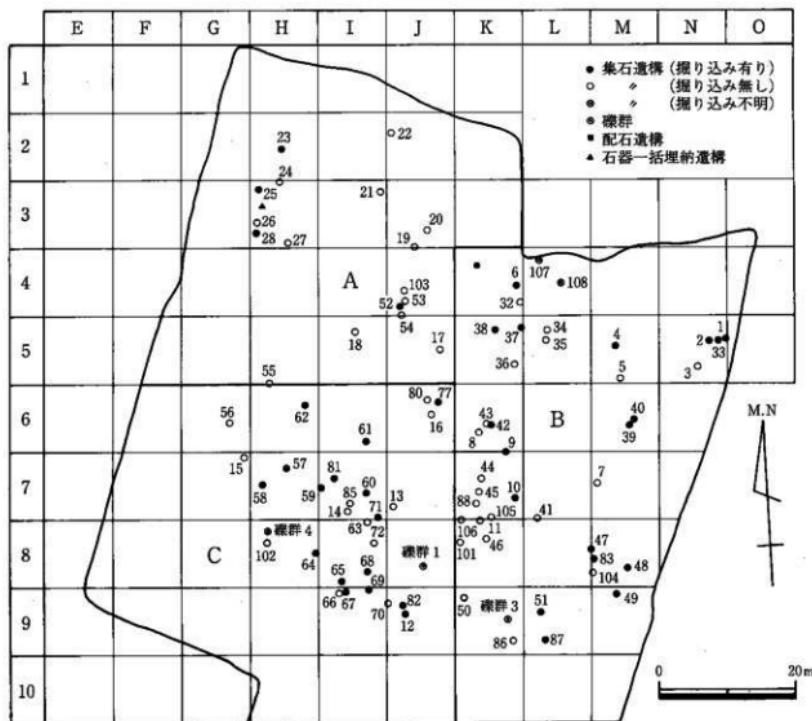
第9図 VI層 集石造構分布図



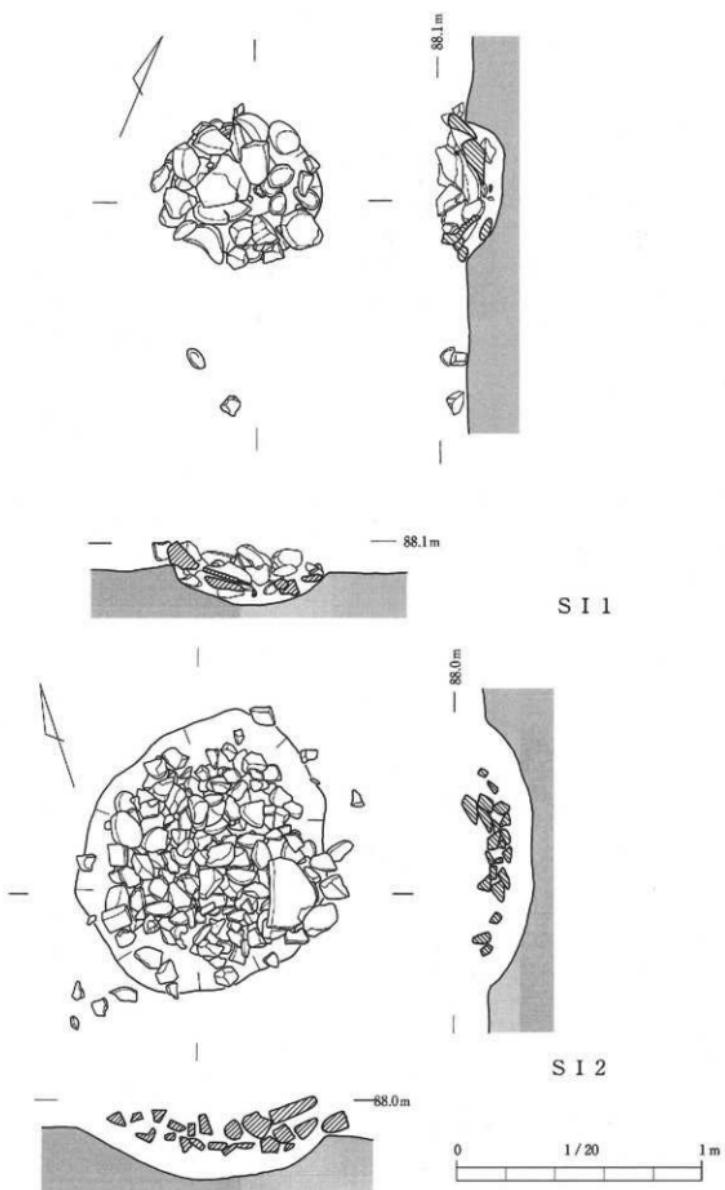
第10図 VII層 集石遺構と砂群の分布



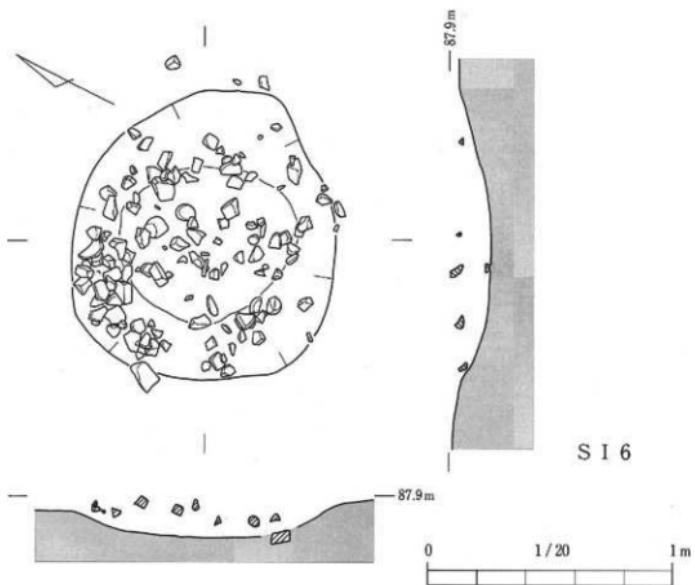
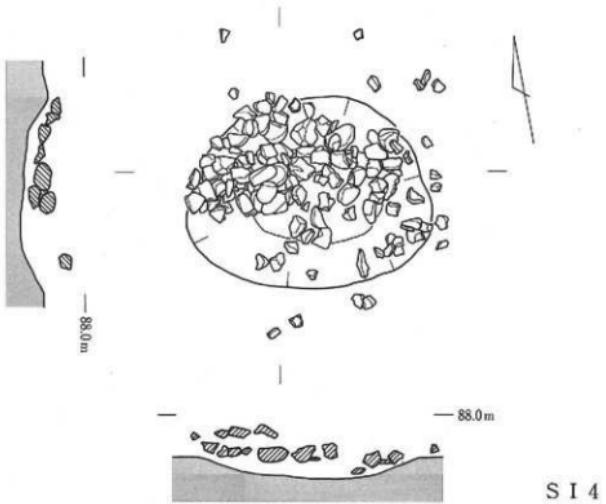
第11図 VII層 集石遺構と検出層不明の集石遺構、礫群の分布



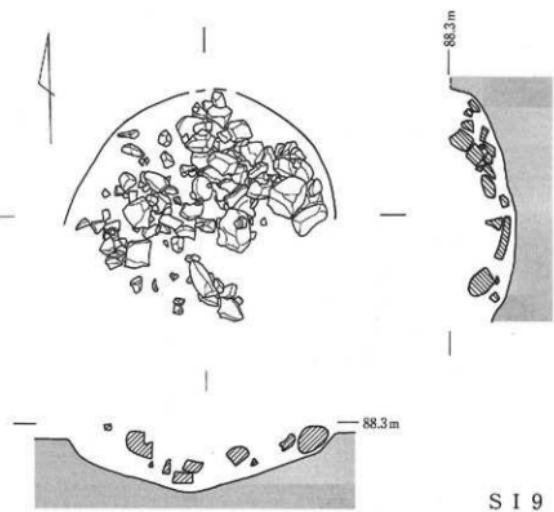
第12図 A・B・C区の集石遺構、磯群、配石遺構、石器一括埋納遺構の分布



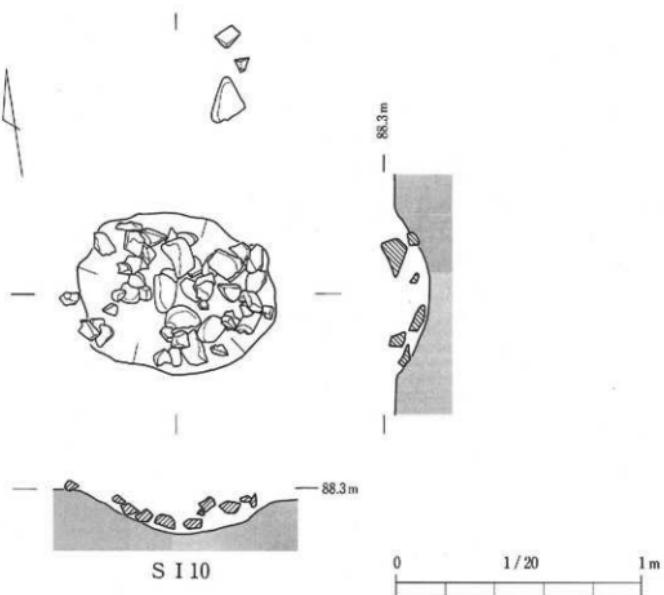
第13図 集石構造(1)



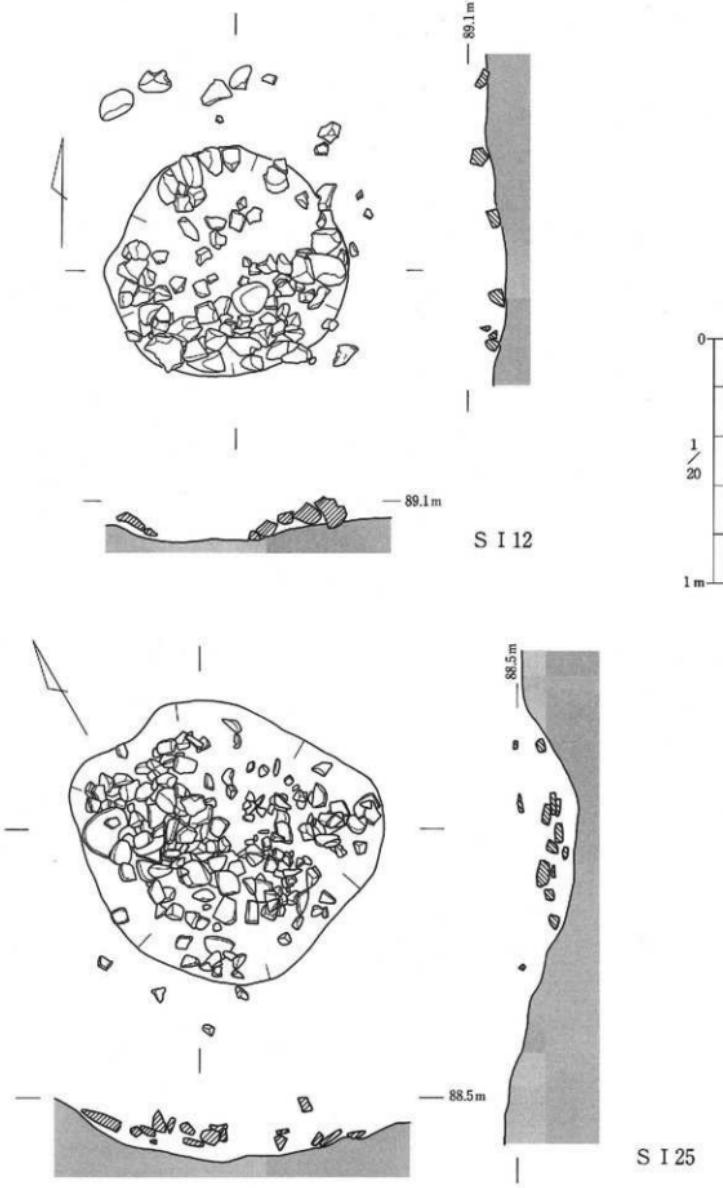
第14図 集石遺構(2)



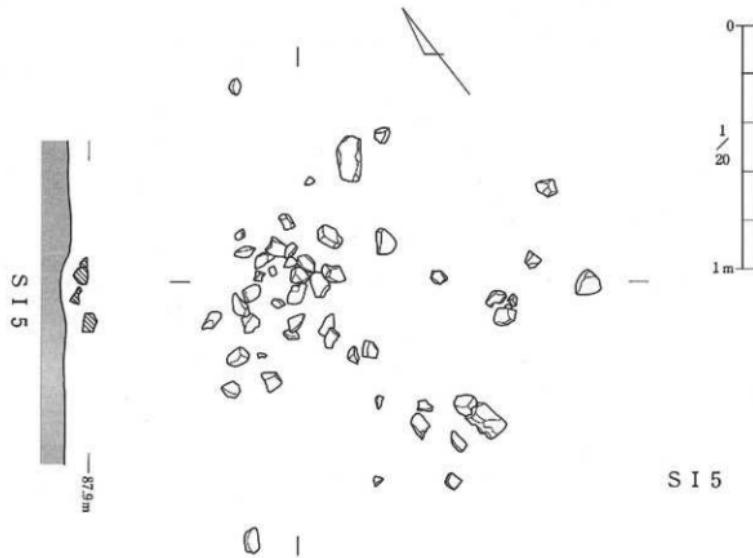
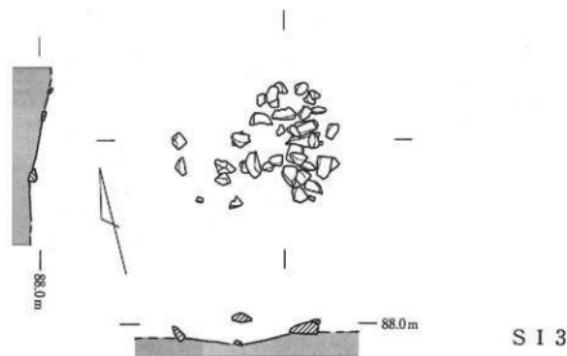
S I 9



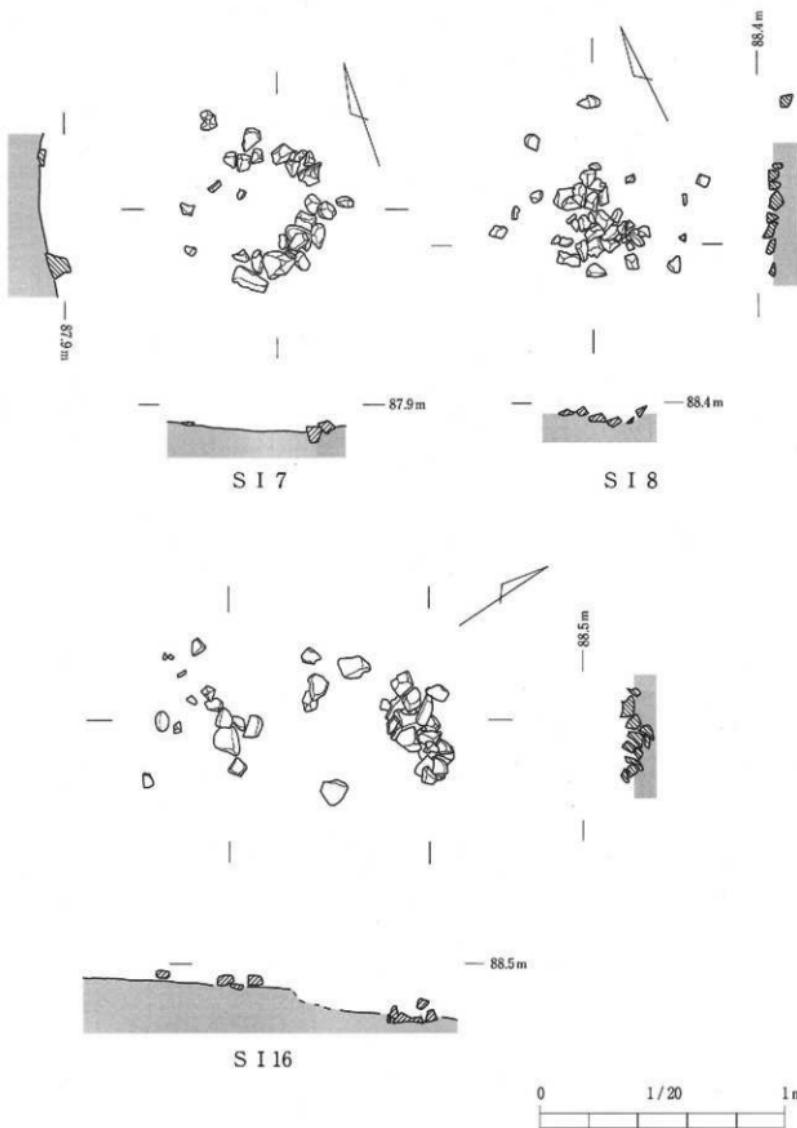
第15図 集石遺構(3)



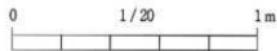
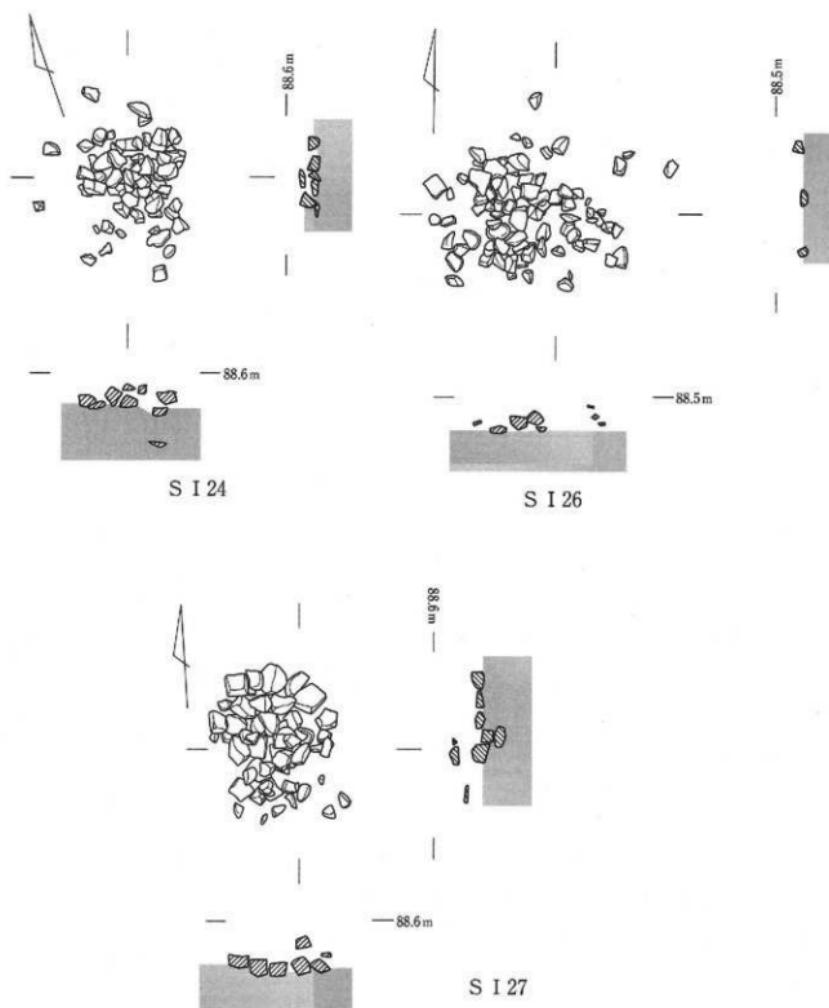
第16図 集石遺構(4)



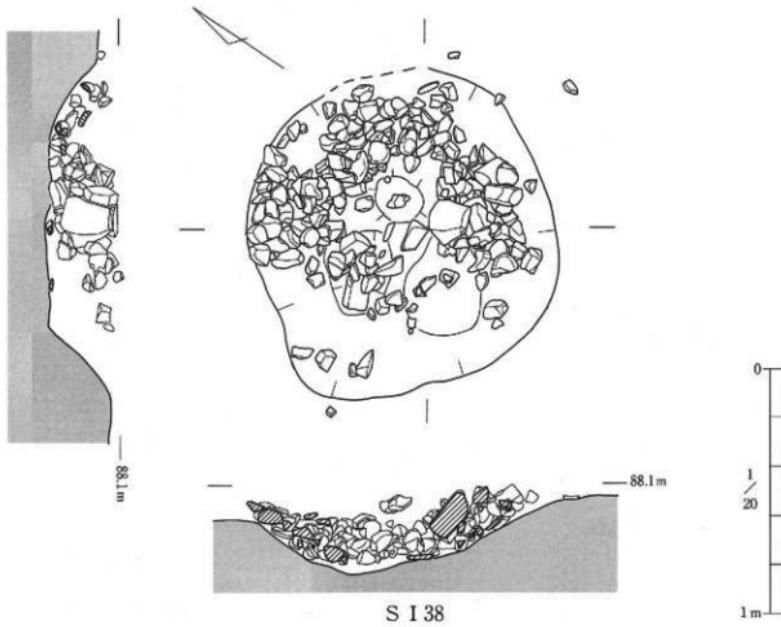
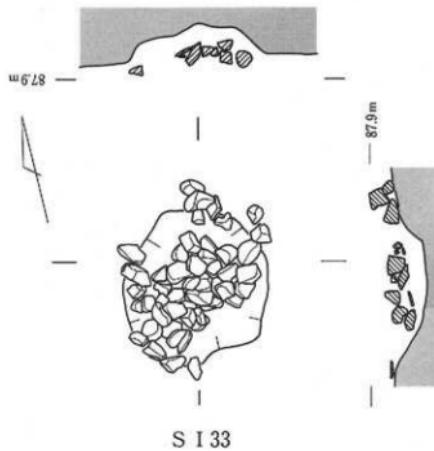
第17図 集石遺構(5)



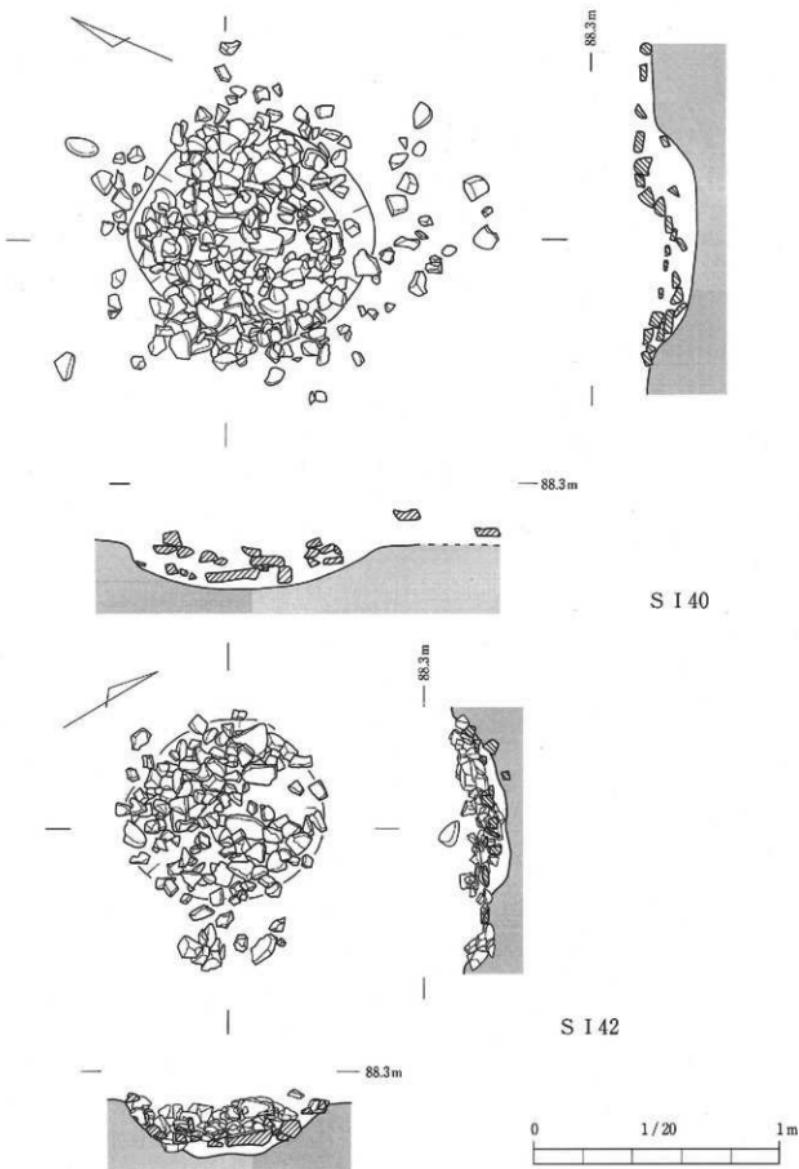
第18図 集石造構(6)



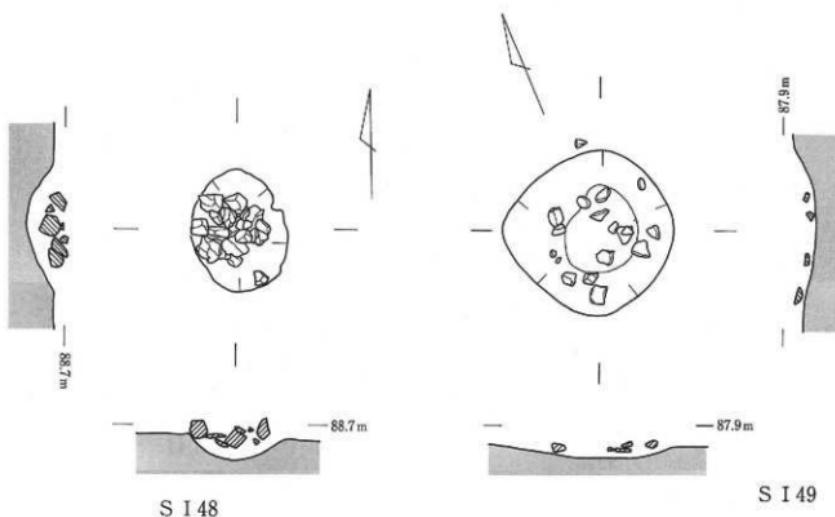
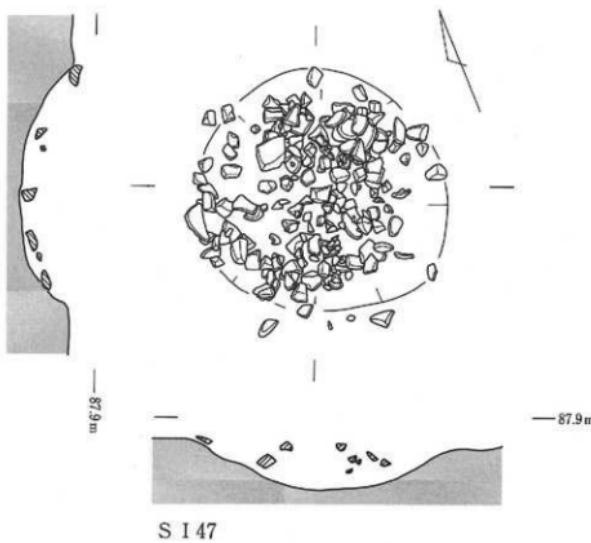
第19図 集石遺構(7)



第20図 集石遺構(8)



第21図 集石遺構(9)

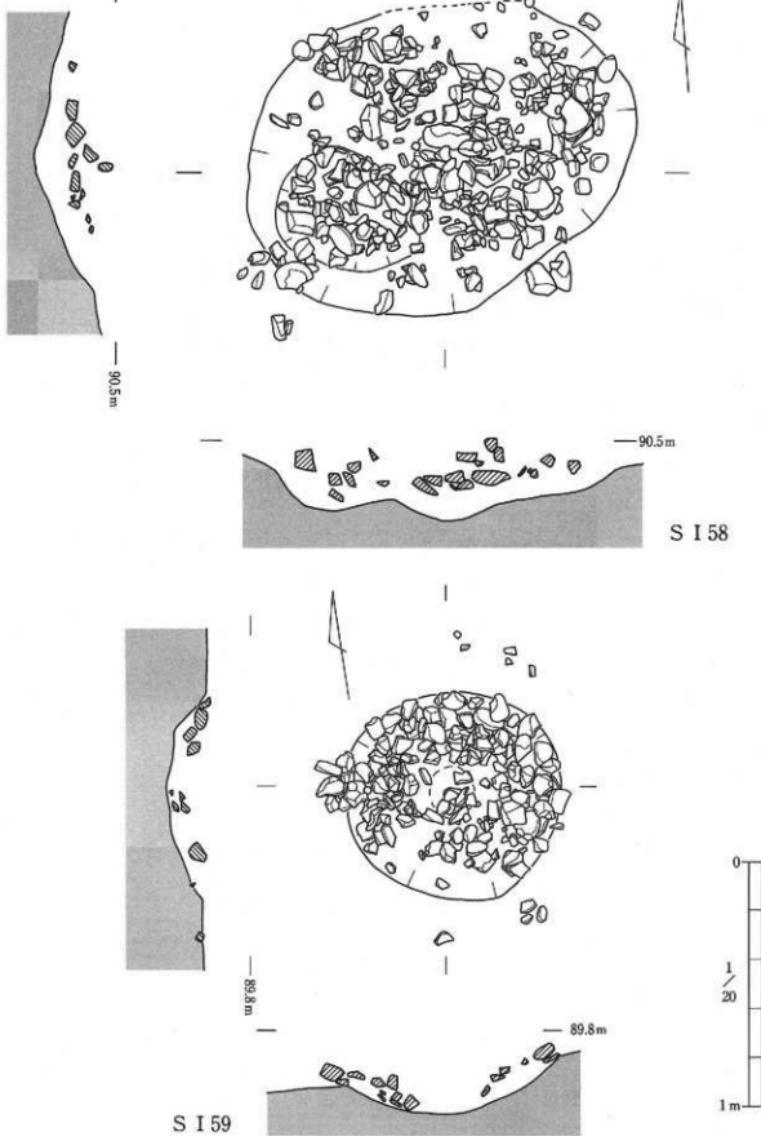


0 1 / 20 1 m

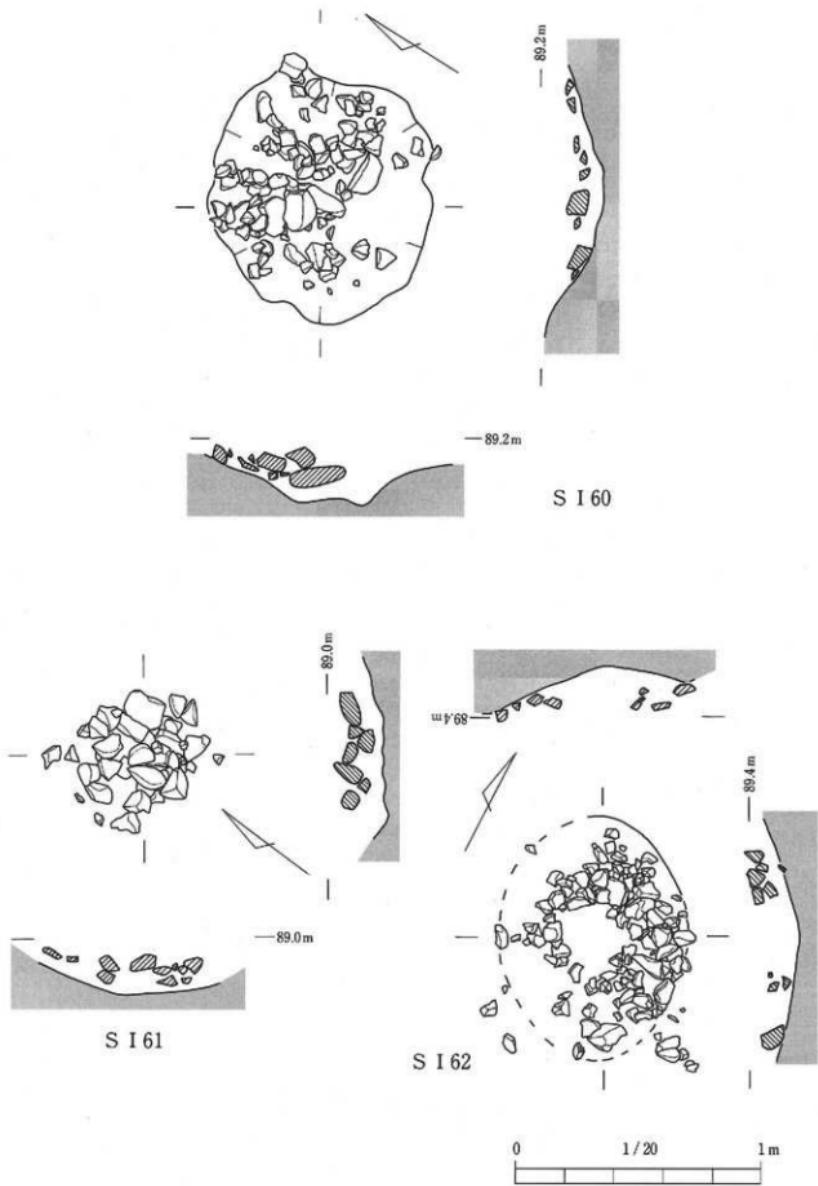
第22図 集石遺構 ⑩



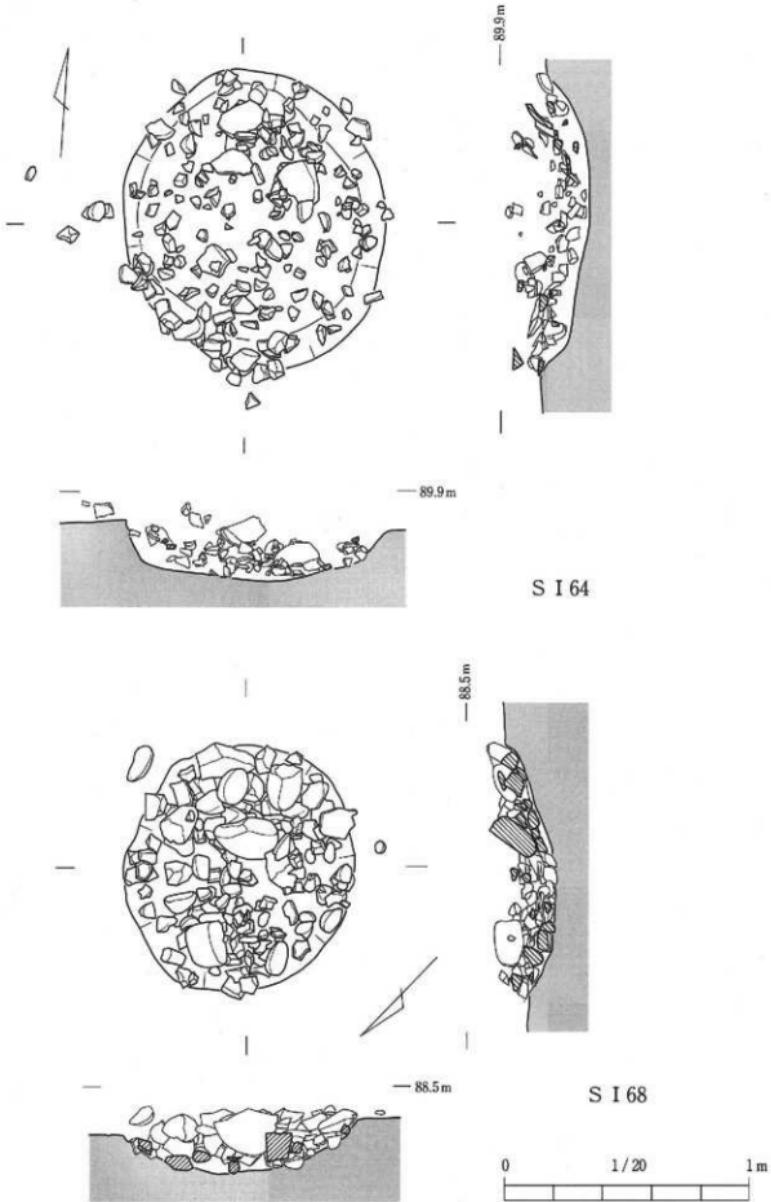
第23図 集石構造(II)



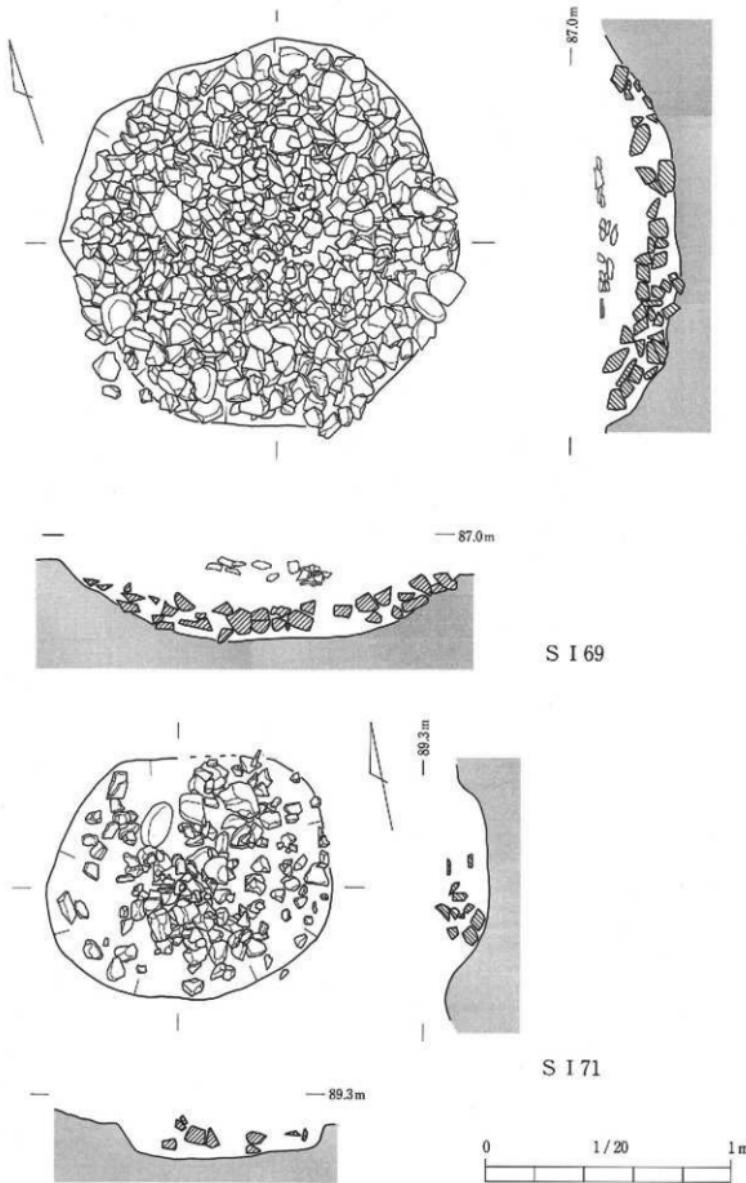
第24図 集石遺構 (12)



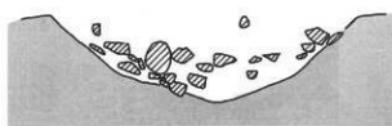
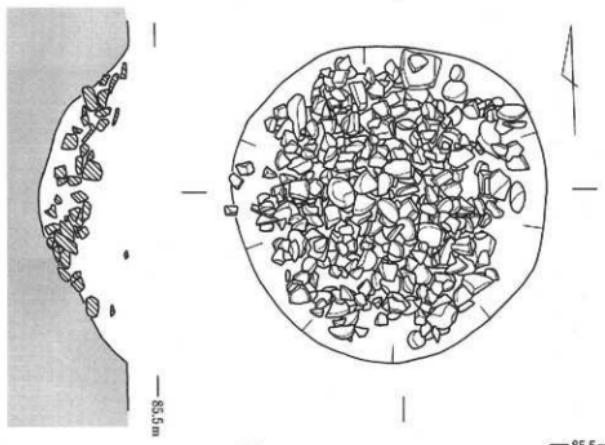
第25図 集石遺構(13)



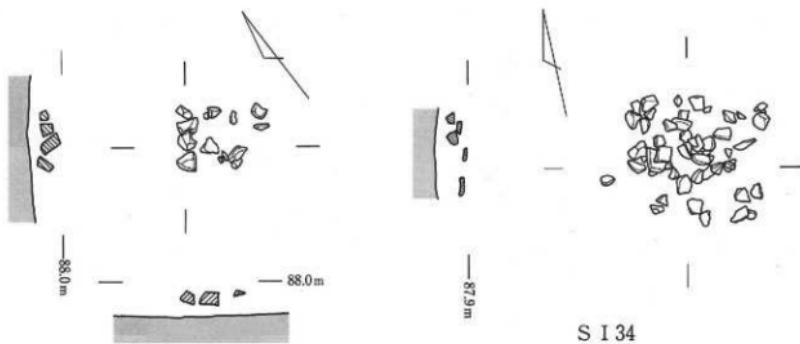
第26図 集石遺構(14)



第27図 集石遺構(15)

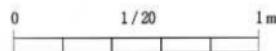


S I 74

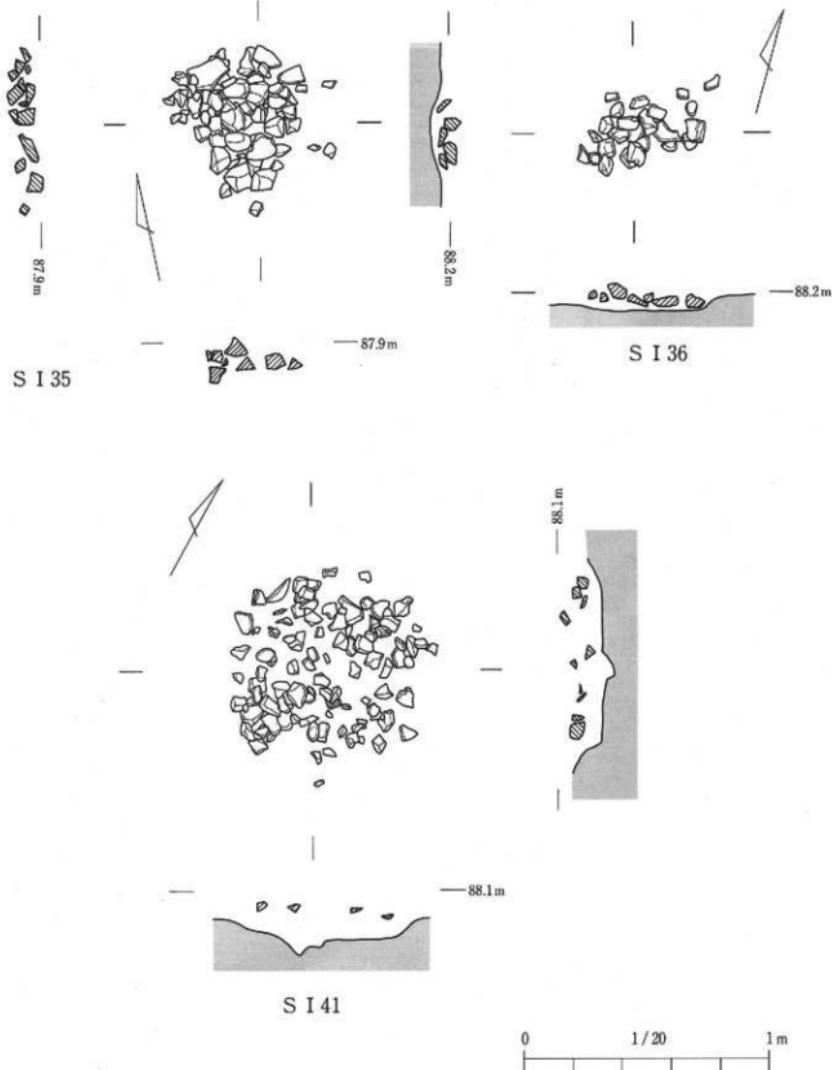


S I 32

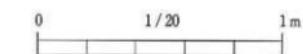
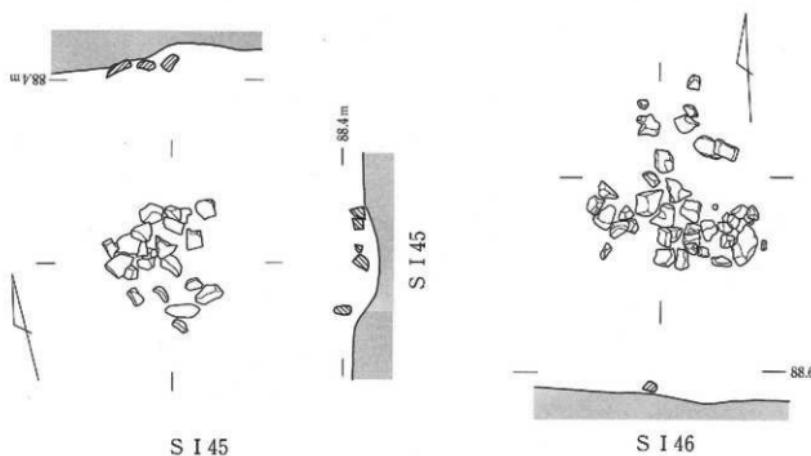
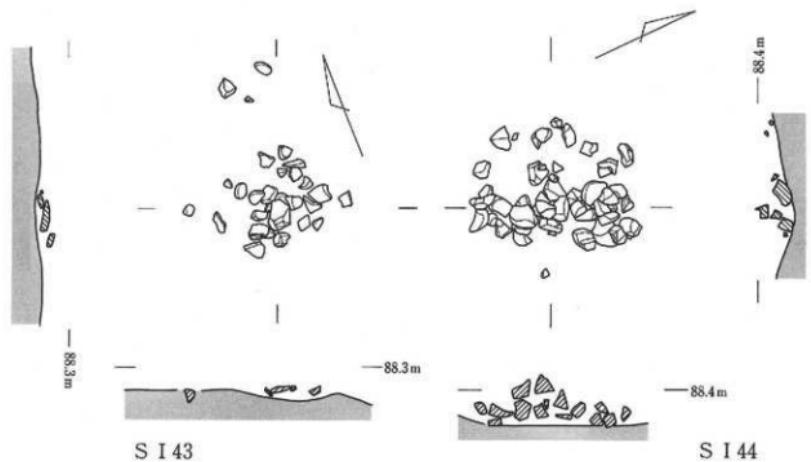
S I 34



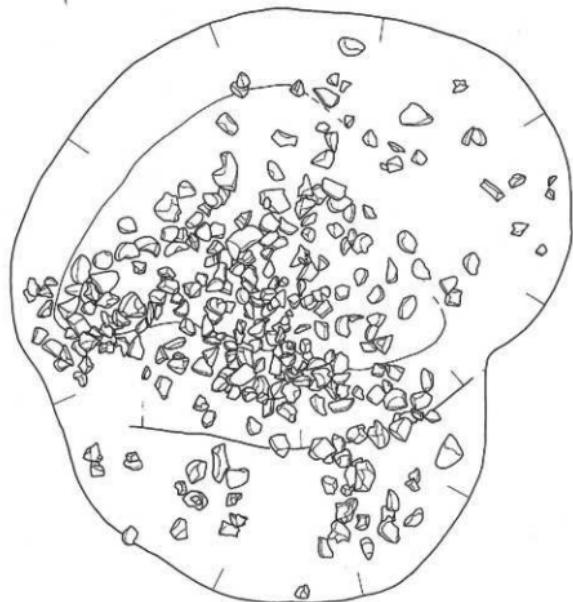
第28図 集石遺構 (16)



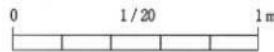
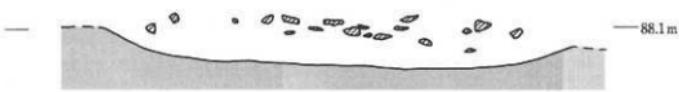
第29図 集石遺構(17)



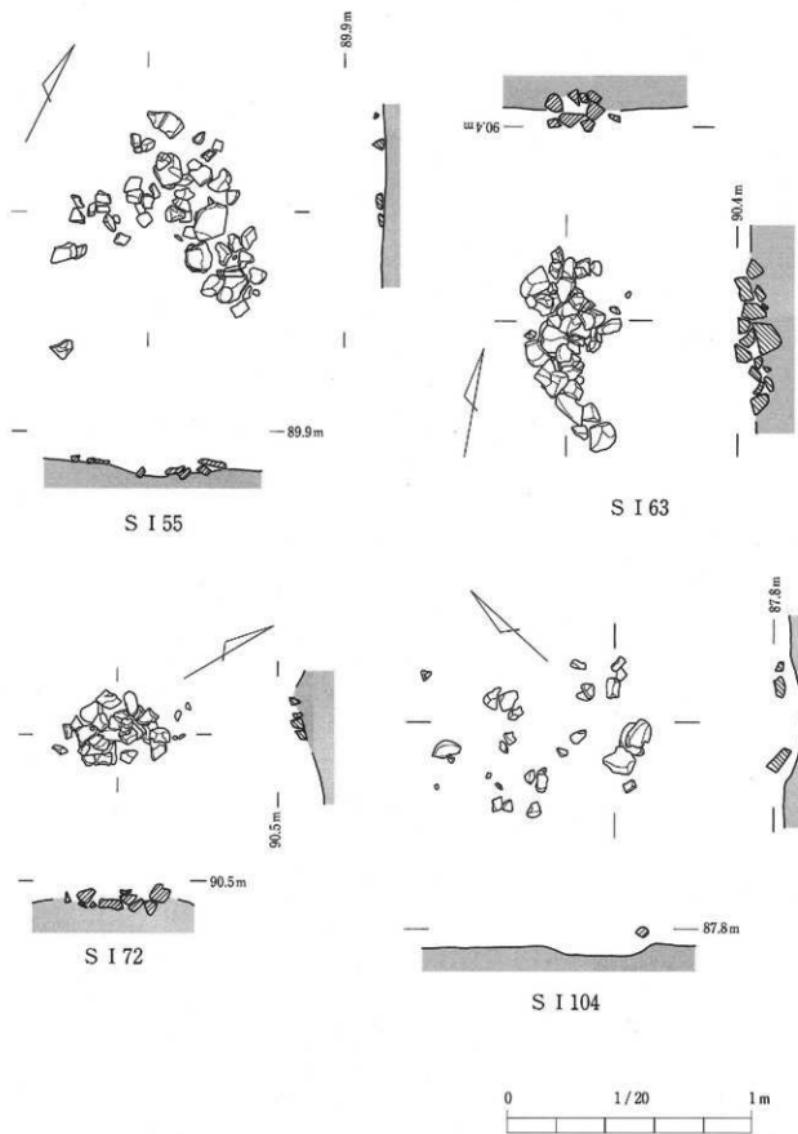
第30図 集石遺構 (18)



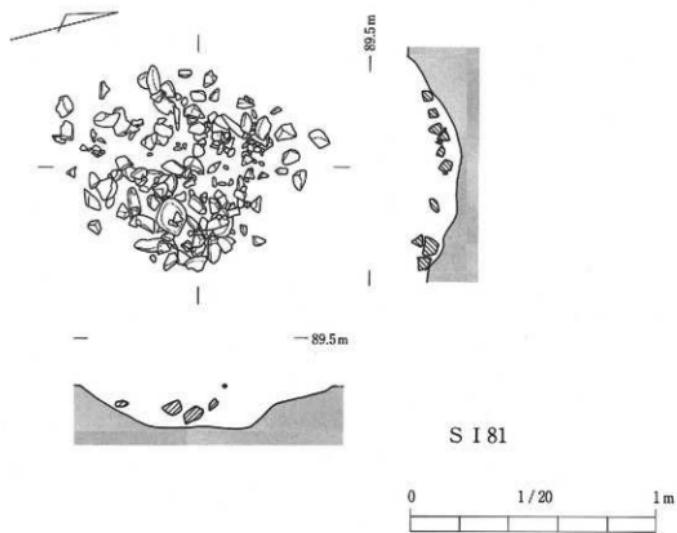
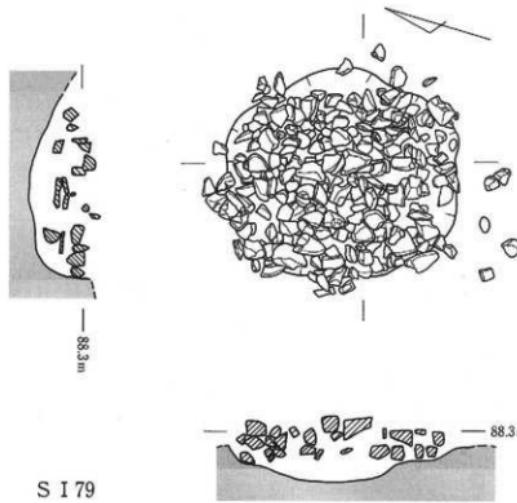
S I 51



第31図 集石遺構(19)



第32図 集石遺構 (2)



第33図 集石遺構(2)

第2節 土器

1 草創期の土器（第34図）

草創期に属すると見られる土器は、主にVI・VII層中より少量出土している（1～6）。

1～4は、外面に多段の爪形文を施すものである。器形等の全容は判らない。爪形文はヘラ状工具の押圧によると見られる。5は貝殻による文様を施す口縁部片で、口縁端部に貝殻の殻頂部の圧痕文を、その下位に貝殻腹縁の圧痕文を施す。6は外面に綾杉状の短沈線文を施す。

2 早期の土器

早期に属する土器は量的に最も多く、早期中葉の後半頃から後葉の各型式に属する個体が、VI層、VII層、さらにはA区の局地的な層であるa層、b層中より出土している。

それらは、大きくは貝殻文円筒形土器系（A類とする）、押型文系（B類）、縄文・撚糸文系（C類）、平格・塞ノ神式系（D類）に分類可能であろう。ただし、詳しくは後述するが、各類型と出土層位の関係について一瞥してみても、さほど厳密な相関を導き出すことができない。そこで、以下においては、各類型ごとに記述を行うこととし、それぞれの出土位置（平面・垂直）については後の節で検討したい。

A類（第35～37図）

貝殻による施文と円筒形を呈する深鉢形の器形が特徴となる。1類～4類に細別可能であるが、いずれも出土量は多くない。

A 1類は外面に貝殻条痕の地文を施す胴部片（7）のみ。器壁は厚めである。

A 2類は外面に貝殻腹縁による圧痕文を施すもの（8～10）。8は外面に楔形突帯を付す。また10は本類に属する底部片で、角筒形をなす。

A 3類は口縁端部が内湾し、外面に横「ハ」字形をなす短沈線文や綾杉モチーフの貝殻腹縁圧痕文（連点状となる）、あるいは貝殻による綾杉状、波状の条痕文を施す一群である（12～31）。13は外面上部（稜線より上）に連点状の貝殻腹縁圧痕文、下部に綾杉状条痕文を施す。口縁部の内湾の度合いが著しい。22は横・斜方向の一一周する貝殻腹縁圧痕文を施す。28・29・31は外面文様が貝殻腹縁による押し引き状となる。

A 4類は厚手の器壁と内面の丁寧なナデ調整が特徴で、外面は条痕文施文を基調とする（32～36）。37は外面に擦過痕様の細沈線文が見られる。また一部赤色顔料の付着が認められる。ここに含めたが、全容は判然としない。

B類（第37～78図）

押型文系土器群を包括しており、器形、文様等多様性に富んでいる。今回は深鉢を中心に器形、特に口縁部の形態的特徴を重視して細分を行った（挿図参照）。ただし、ある程度の残存度を有する資料でなければ、どの類型に属するのか判別が難しい。加えて中間的な様相を示す個体もあるため、あえて全個体について分類することはせず、各類の典型的のみを例示するにとどめる。

B 1類は口縁部がゆるやかに外反し、端部が最大径を示すもの。胴部は張らない。39～44や48などがこれに該当する。文様は山形押型文、梢円押型文がいずれも縦方向に施文される。

39は外面に大ぶりな山形押型文が施文される。41は内面に径約5mmの列点文を施している。外・

内面に施されている山形押型文は、約18mmスパンで繰り返されるため、この列点は原体の押圧によるものである可能性も指摘できる。44は原体長が約20mmと推定できる。

B 2類は直線状に外開きになるもの、バケツ形に近い形状となる。59や64、68が該当するほか、わずかに胴部の張る67もこれらと近い関係にあると見られる。口唇部が角張るものと丸くおさまるものがある。59は内面に原体条痕様の刻みが施される。文様は山形押型文、橢円押型文の両者が認められる。

B 3類は口縁端部がわずかに外反する。胴部の張りは弱い。さらに細かく見るならば、端部が鋭く屈曲するもの（95や98・109～119・175・183など）、ゆるやかに反るもの（73・75・82・90・108など）、端部の形状が整刃状になるもの（87・89など）に細分されよう。平口縁を基本とするが、126のように明らかに波状口縁となる個体もある。

B 4類は口縁部が外反し、胴部が張る一群で、口縁部径と胴部径がほぼ同じか、胴部径の方が大きくなる。このB 4類が、本遺跡における該期の土器の中で最も出土量が多い。121～123・140～144・175・186・275～279・283～287などが典型資料である。また壺形を呈する個体のうち、340～344は本類に属すると見られる。175や194などは、口縁部が強く外反し、口唇部を拡張させてそこも文様帶としている。このB 4類の中には、内面の文様帶以下にケズリ状の工具ナデ調整（以下「ケズリ」と表記する）を施す事例が多く認められる。その結果、内面に明瞭な稜線が形成され、あたかも長胴の土師器壺のような断面形を呈する。明瞭なケズリとは認められないものの、粗い工具で内面調整を行っている個体も多い。そういう特徴的な調整法はB 3類にも見られ、両類の近縁性を示す証拠となろう。

B 3類と4類には、山形押型文、橢円押型文のほか、小さな突起物を有する軸状工具の回転によると見られるイチゴの粒状の文様（310～327）、平行押型文（329～332）などの文様が施される。328は、いわゆるネガティプ橢円文と見られる。ほとんどの個体が外面と口縁上部内面および口唇部を文様帶とする。118や141、192、262のように外面に無文帶を設けるものもある。また418～420、423のように橢円押型文と山形押型文の組み合せによる外面文様が施される胴部片も、ここに含めるべきものであろう。小さな突起物を有する軸状工具の回転文は、器壁に木の纖維状の圧痕が残る個体があることから、木の枝の回転による文様と推測される。「枝回転文」と仮称しておく。口縁部片324は外面に沈線文を、内面の上部に「枝回転文」を施す。平行押型文は条痕文や撚糸文との識別が難しい。橢円押型文あるいは山形押型文がくずれて成立したものと考えられる。

なお、B 5類を除く胴部、底部片は第62～77図にまとめている。橢円押型文を施す428は、胎土中に種子の炭化物が混入している。409・449は、屈曲して鈍い稜線を形成する胴部片である。409は外面に不規則方向の橢円押型文が施される。底部は平底を呈するものが大多数を占めると見られるが、493のような尖底に近い丸底の個体や、495のような砲弾型の丸底を呈する個体もわずかながら存在する。この495には、外面に浅く不明瞭な山形押型文と条痕様の文様が施されている。526は上げ底気味の平底を呈し、内面はケズリ状となる。527は小破片であるため不明瞭であるが、底面にも山形押型文が施される。

挿図 B類の口縁部形態



B 5類は口縁部が外反し、脣部が稜をなして屈曲する。施文される山形押型文は浅く、文様の「山」の部分の角度が概して鈍い。また走向も一定でない場合が多い。さらに刻目（施文原体による？）を付した突帯を巡らせるものもある（588）。そういう文様の特徴を有するため、このB 5類に属する個体については、脣部破片のみの場合でも識別が可能である（第78図）。

C類（第79～81図）

繩文・撚糸文が施文される土器群である。器形はB 3・4類と似通っており、外面に加えて口縁上部内面を文様帶とする点や、内面ケズリの調整が見られる点、あるいは壺形の器種があること等の共通点が認められる。

施文された繩文は単節で、原体は2段L Rの紐が卓越しているようである。608と609は壺の同一個体で、わずかに肥厚させた口唇部に鋸歯状の短沈線文が施される。614～618には波状、∞状の変形撚糸文が施される。619は稜をなして屈曲する脣部で、外面に網目状の撚糸文が施文される。665、666は外面に結節繩文が施されており、文様はC類と、器形はB 5類と関連が深いようと思われる。

D類（第85～113図）

口縁部が外に開く器形が基本となる平格・塞ノ神式系の諸型式を包括している。B類同様、深鉢の器形（特に口縁部形態）を重視して細分を行なうが、文様の顯著なものについては、それにも配慮する。

D 1類は、B 5類同様、頸部より上位がゆるやかに外反し、脣部が張り、平底にいたる。波状口縁をなすものも一定量認められる。また口縁端部に瘤状の突起を付したり（670、672など）、数条の突帯を巡らせる個体が多い。突帯は縦や斜め方向に付く場合もある。また、文様構成の面から、頸部以下に繩文が施文されるもの（670、674など）と、沈線文が主となるもの（694、699など）に大別できる。前者を仮にa、後者をbとしておく。

なお、壺形を呈する709～716もここに属すると見られる。やはりaとbという2つの「流れ」が認められる。

D 2類は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部が肥厚するものである。肥厚部分の断面形は三角形ないしは半月形を呈する。1類同様、波状口縁を呈する個体もある。

挿図 D類の口縁部形態



694や699～701などは1類に近い（肥厚帯とするよりはむしろ口縁端部の突帯と表現すべき）もので、瘤状突起や縦方向の突帯も認められる。704～706や722～731などは明瞭な肥厚帯が形成される。壺の735、738も口縁部形態の類似からここに含めるべきものと判断される。文様構成は、1類でのbに相当するものが圧倒的に多く、aに属する資料は717、718などわずかである。

D 3類は口縁部がわずかに肥厚する一群で、745～754や758などがこれに該当する。沈線文や列点文を施し、口唇部には刻目か短沈線文が見られる。ただし、この類型に属する完形資料はなく、頸部以下の文様構成は不明である。

D 4類は口縁部が内湾するもので、文様の構成は3類とほぼ同じである。760～802がこれに該当する。多くはゆるやかに内湾するが、761～764、766や814、815のようにやや極端に屈曲する個体もある。

D 5類は、やはり口縁部が内湾するが、4類とは異なり、あまり張らない胴部との境に明瞭な稜線が形成される。822～845、890～908、914などが該当する。845に見られるように口縁部に沈線文と列点文、胴部に縦方向の網目撲糸文を施す一群と、890、902、903のように沈線による区画内に撲糸文を施す一群に大別できる。826や836などは前者に属する可能性が高い。907、908、914は口縁部に沈線文と列点文を、胴部以下は区画沈線内撲糸文を施す。842や862、863などは口縁部が短く、次に触れる6類に近い。文様は外面全面に沈線文、列点文が展開する。

D 6類は、5類と比較して屈曲部から先の口縁部が短く、直にのびるか、わずかに外方に反るという特徴を有する。850、851、870～883、917などがここに含まれる。全容の判明する個体は存在しないが、おそらくD 5類同様の文様構成を示すと考えられる。

D 5類・6類の底部は925～928のような平底となる。またD 5類・6類に属すると見られる壺形土器もある（921～923）。さらに内面に沈線文を施す皿状の個体も存在する（928）が、これについての所属類型が特定できない。

D 7類は貝殻による圧痕文を施すもので、929～931、936、939などがこれに該当する。出土数は少ない。直に長くのびる口縁部を有する個体が多いが、939などのように短く外反する個体もある。929や936の胴部には貝殻腹縁によると見られる条痕文が施されている。また貝殻文に似た列点文や短沈線文を施す932、937なども、近い位置にあるものであろう。

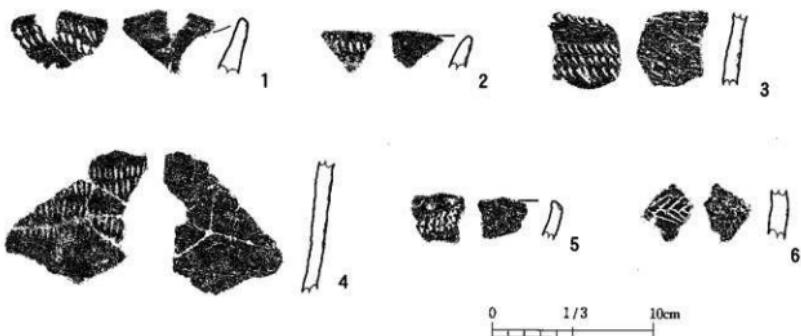
なお、D 3類から7類と同じ器形を呈する無文土器も少量存在する（942～949）。950、951のような無文の壺もある。

D 8類は口縁部が肥厚し、胴部が張り、平底に至る器形の資料で、外面に条痕様の平行沈線文と貝殻によると見られる列点文が付される（952～958）。958は波状口縁をなし、口縁端部近くに瘤状の突起が付いている。ただし、これらについては、本来このD類に含められるのかどうかという点を含め、位置づけに関して不明な点が多い。

以上その他、出土層から該期に属すると見られる特殊遺物がある。

959は耳栓であろうが、それとするにはやや大きく、造りも雑である。

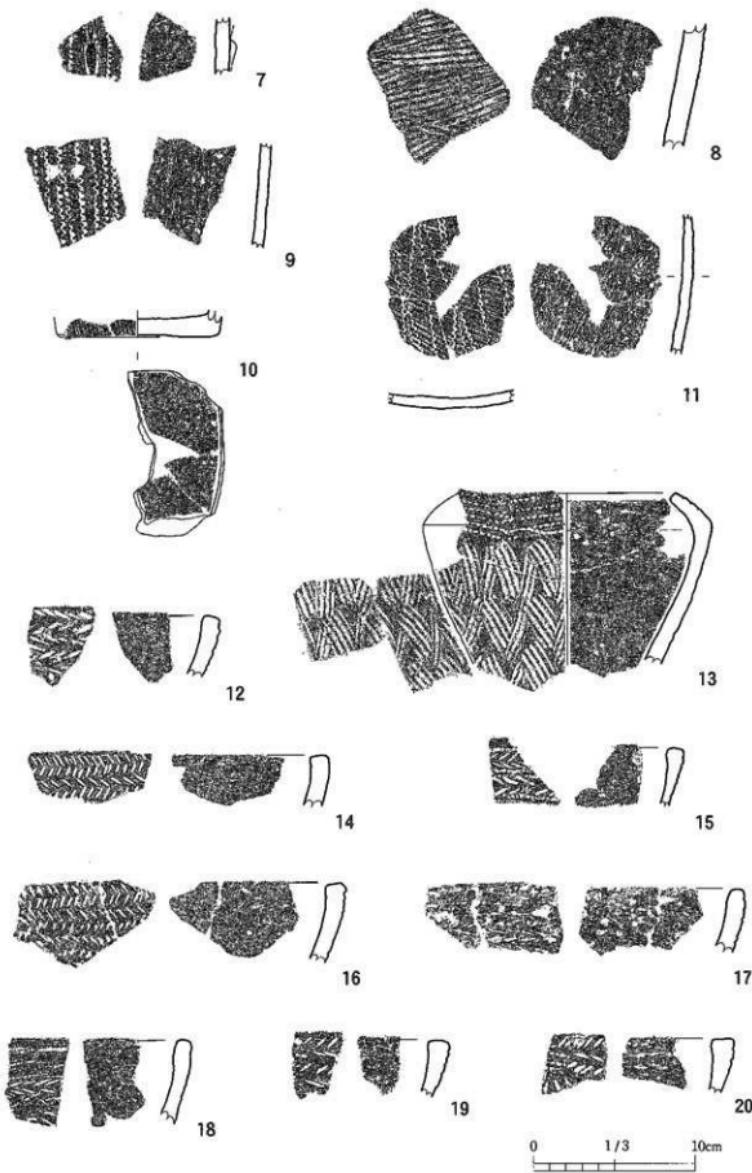
960は円柱状の土製品。圓面左側は欠損している。



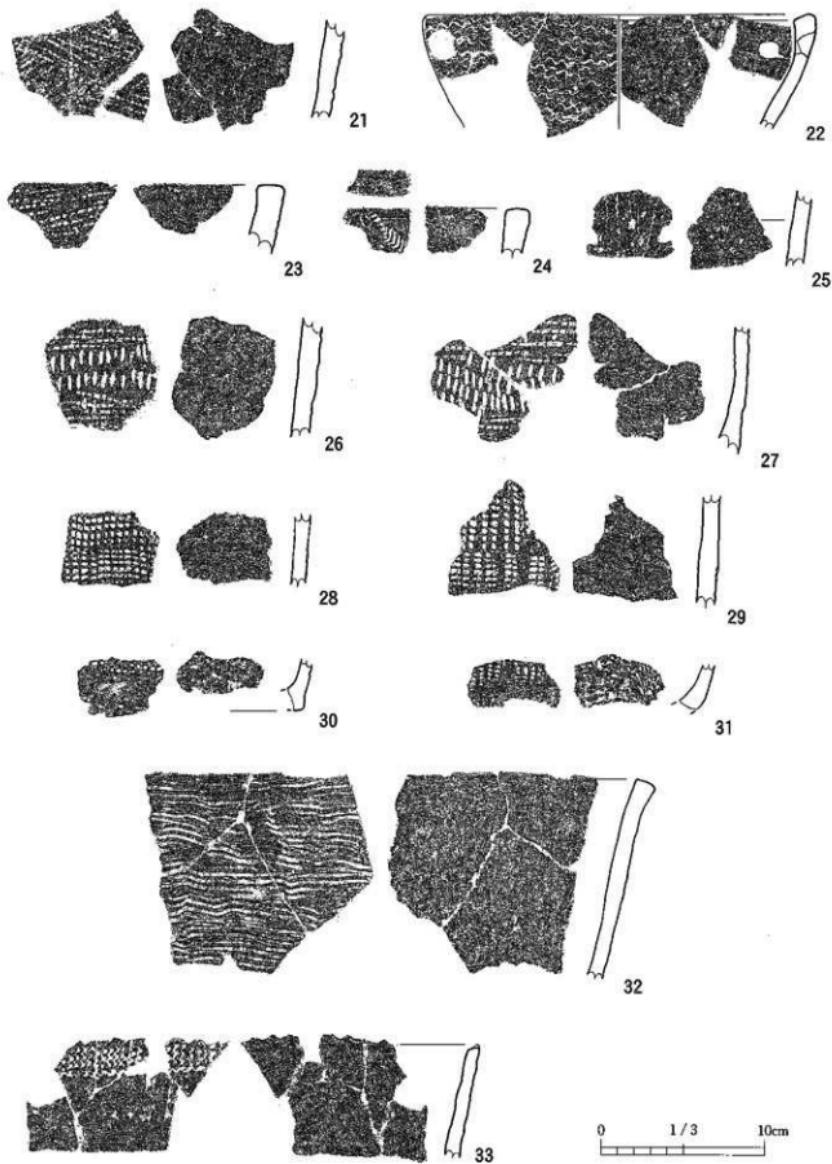
第34図 出土土器(1)

表3 土器観察表(1)

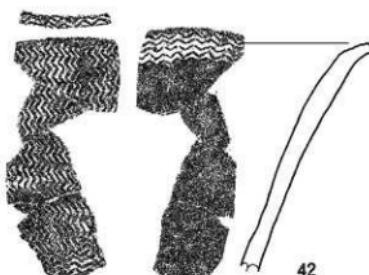
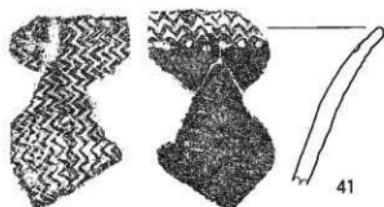
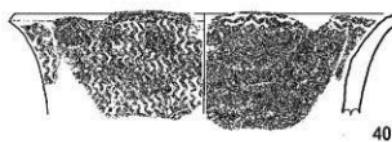
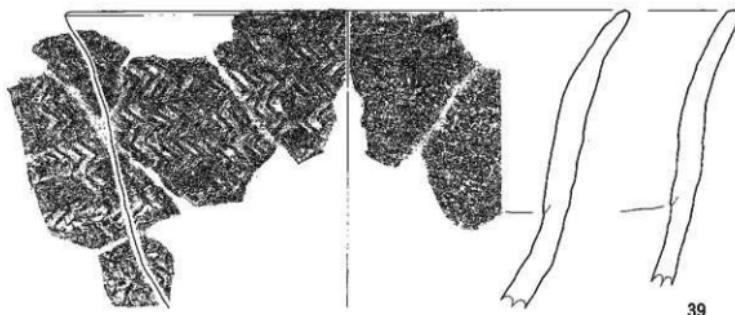
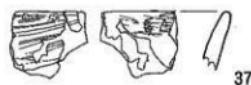
番号	出土地点	出土層	文様及び調整			色調		胎土	備考
			口唇部	外	内	外	内		
1	H・2	-		爪形文・ナデ	ナデ	暗灰黄	暗灰黄	φ3浅黄橙・φ1灰白・φ1褐 灰	
2	H・5	b		爪形文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	φ1灰白	
3	H・2	b		爪形文・ナデ	ナデ	にぶい黄 褐・褐灰	にぶい黄橙	φ1金光沢・φ3白・φ1灰白 (外)スス付着	
4	K・3	VI		爪形文・ナデ	ナデ	にぶい黄 橙・灰黄褐	にぶい黄褐	微細黒光沢・φ1白半透明・ φ1灰白 (外)スス付着・風化	
5	I・11	VII	貝殻紋顶部 压痕文	貝殻紋压痕 文・ナデ	ナデ	黄褐	にぶい黄	φ1.5淡黄	
6	-	-		沈線文・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	φ4オリーブ褐・φ1無色光沢・ φ1黒褐	



第35図 出土土器(2)

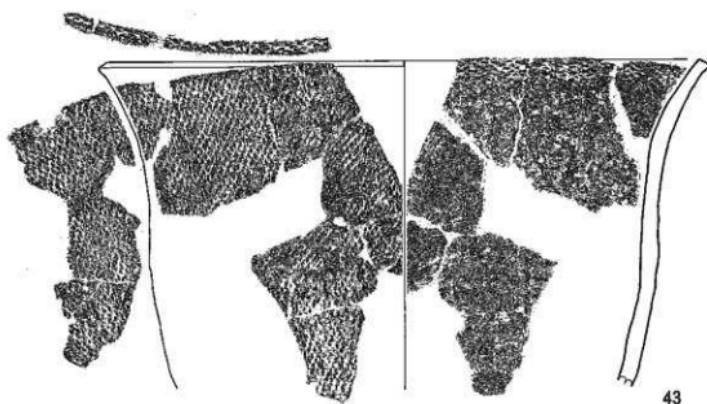


第36図 出土土器(3)

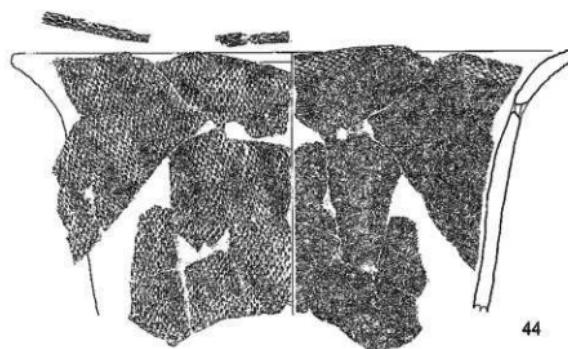


0 1 / 3 10cm

第37図 出土土器(4)

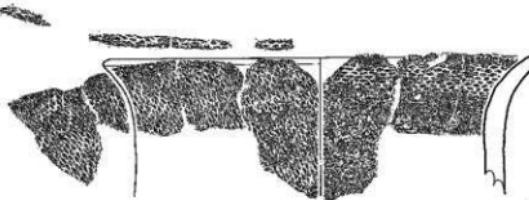


43

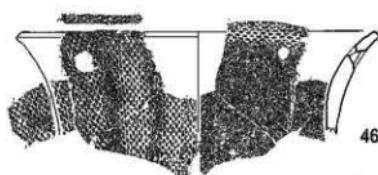


44

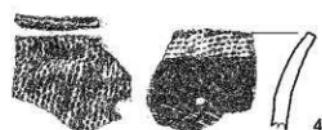
15cm
1
3
0



45

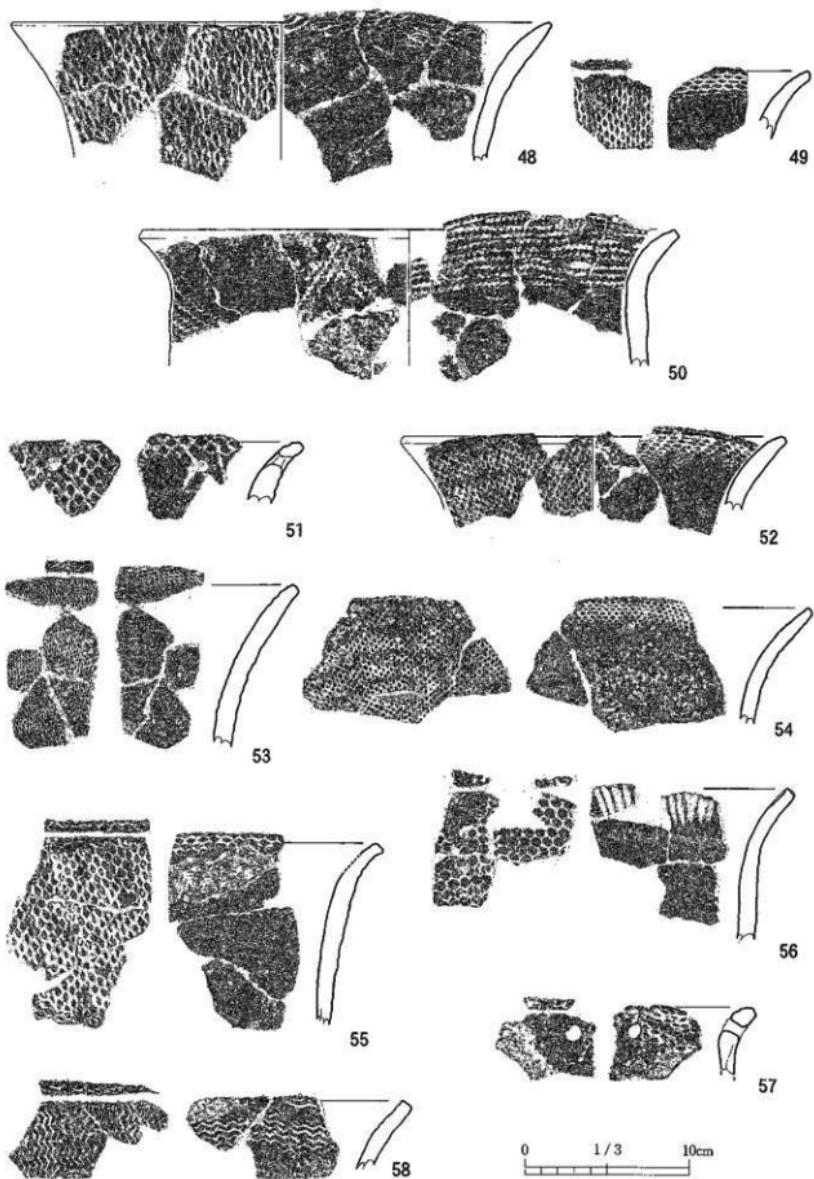


46

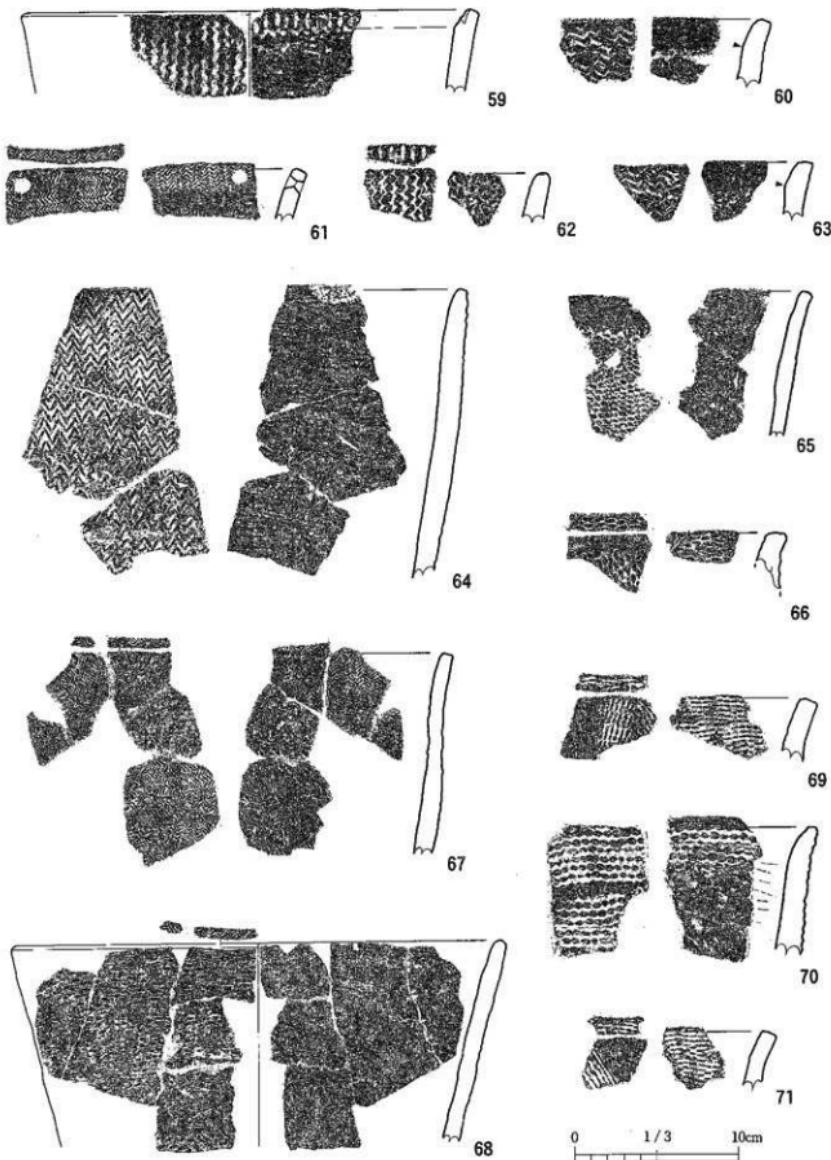


47

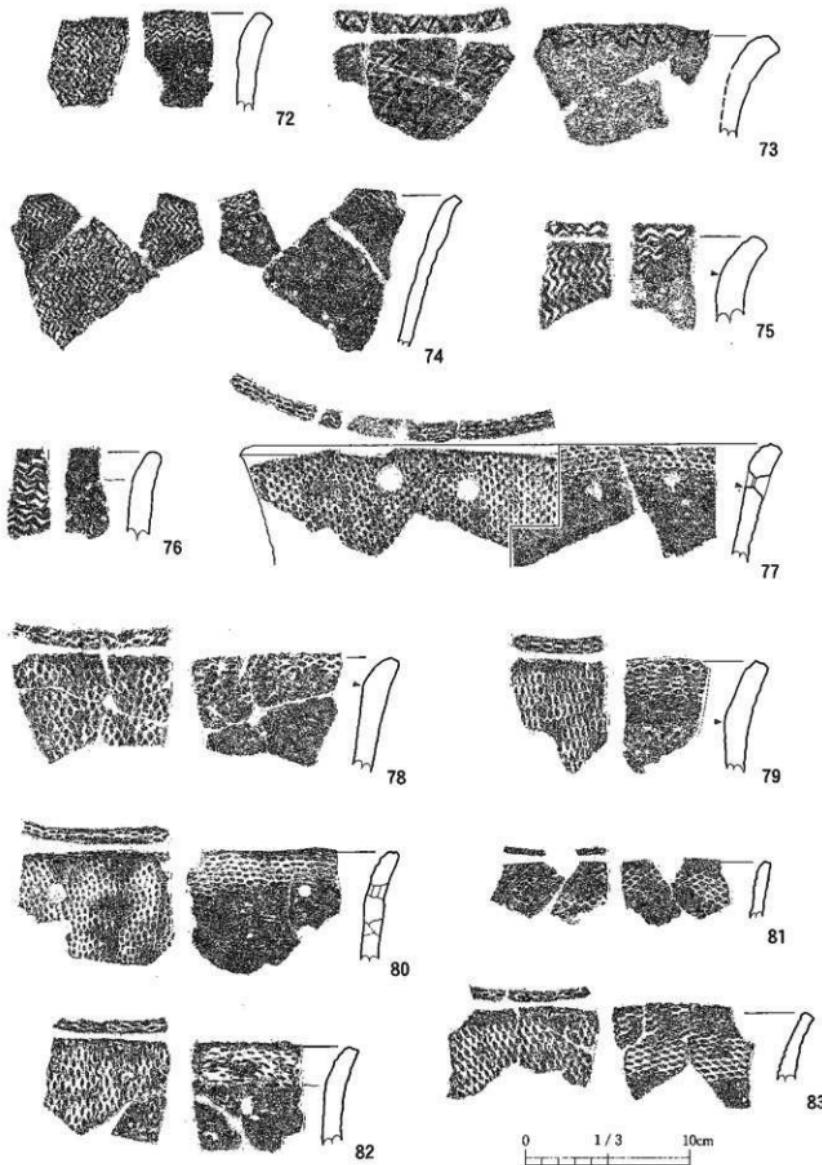
第38図 出土土器(5)



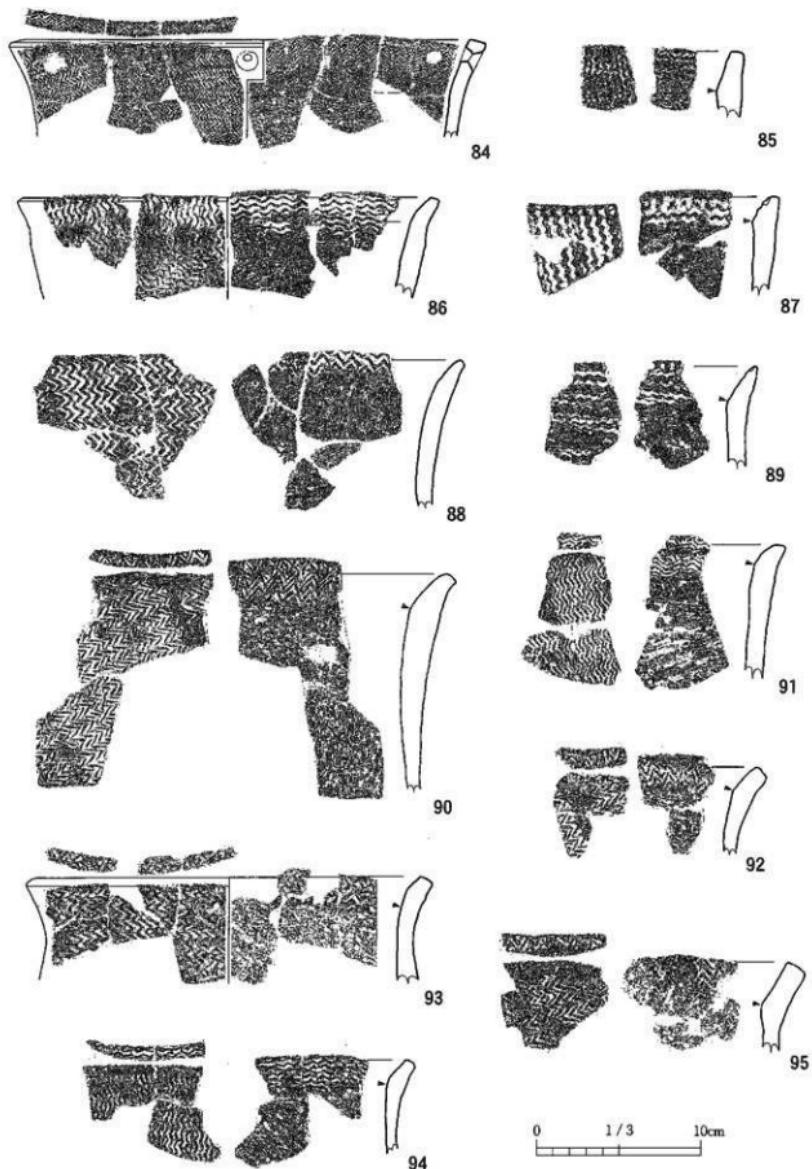
第39図 出土土器(6)



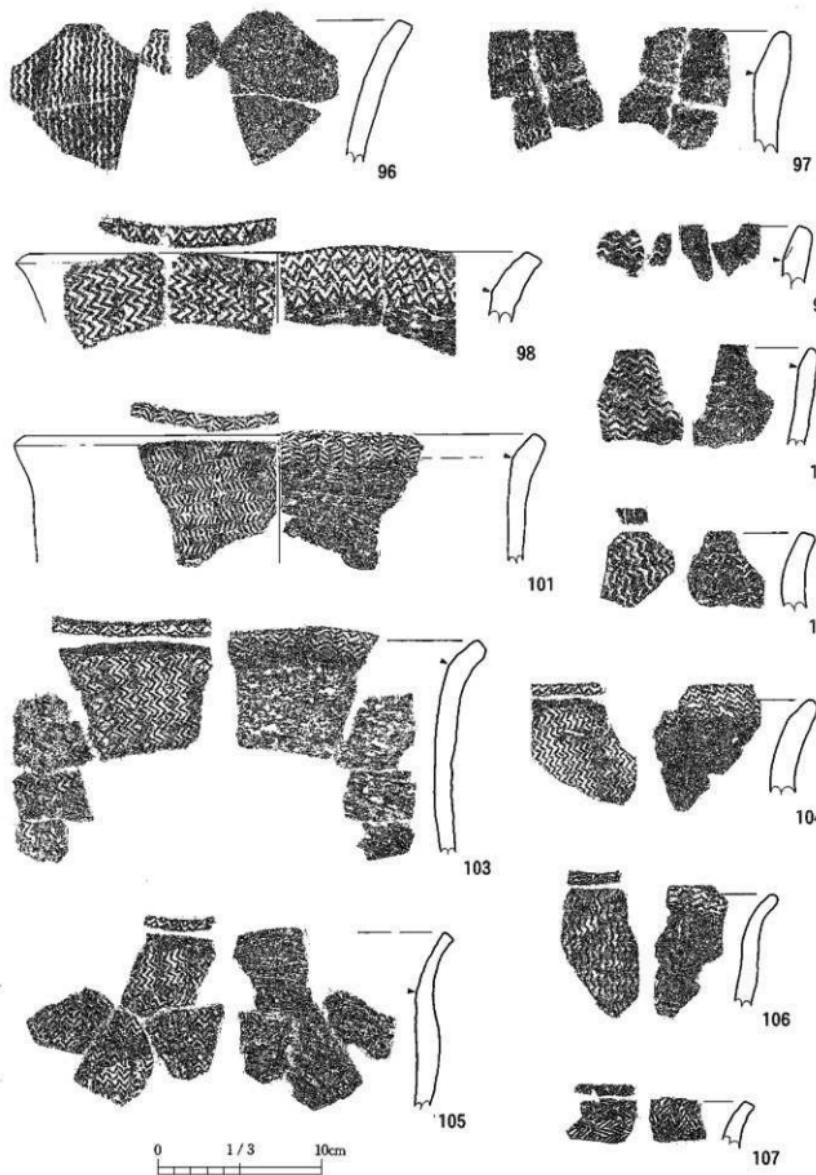
第40図 出土土器(7)



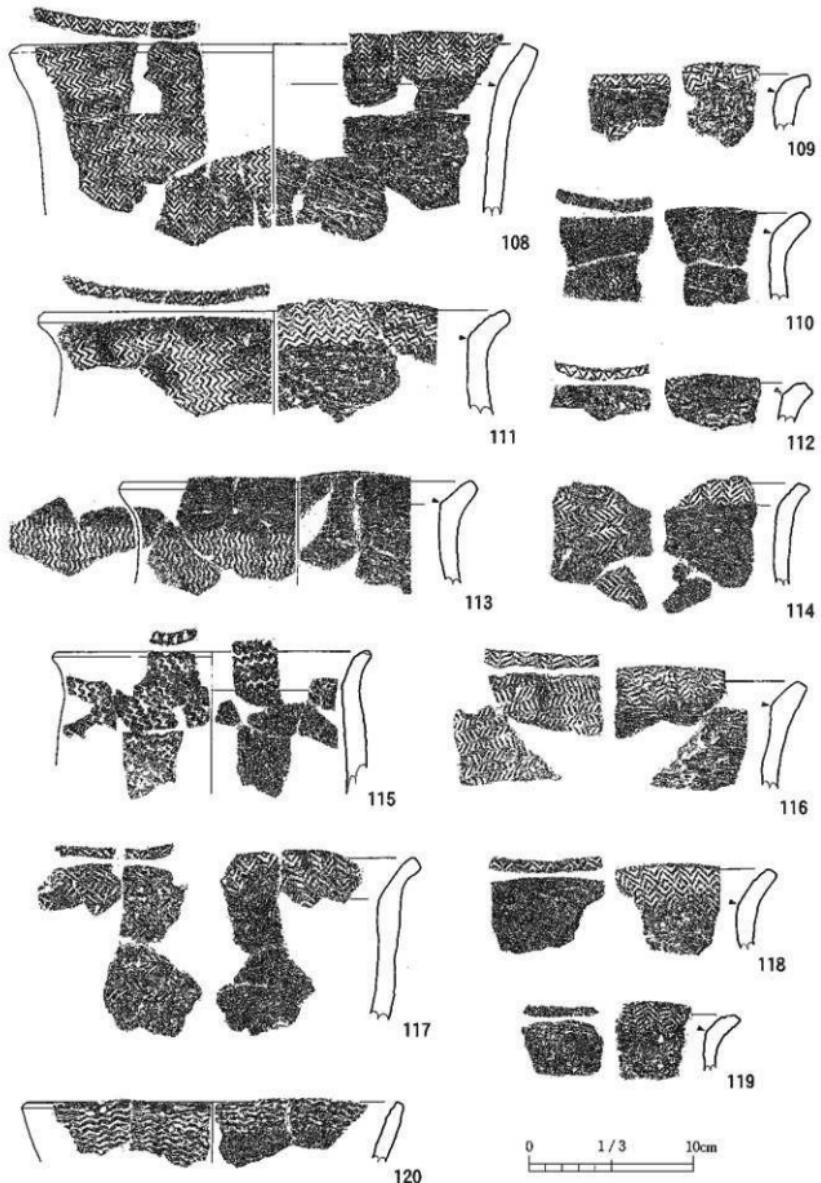
第41図 出土土器(8)



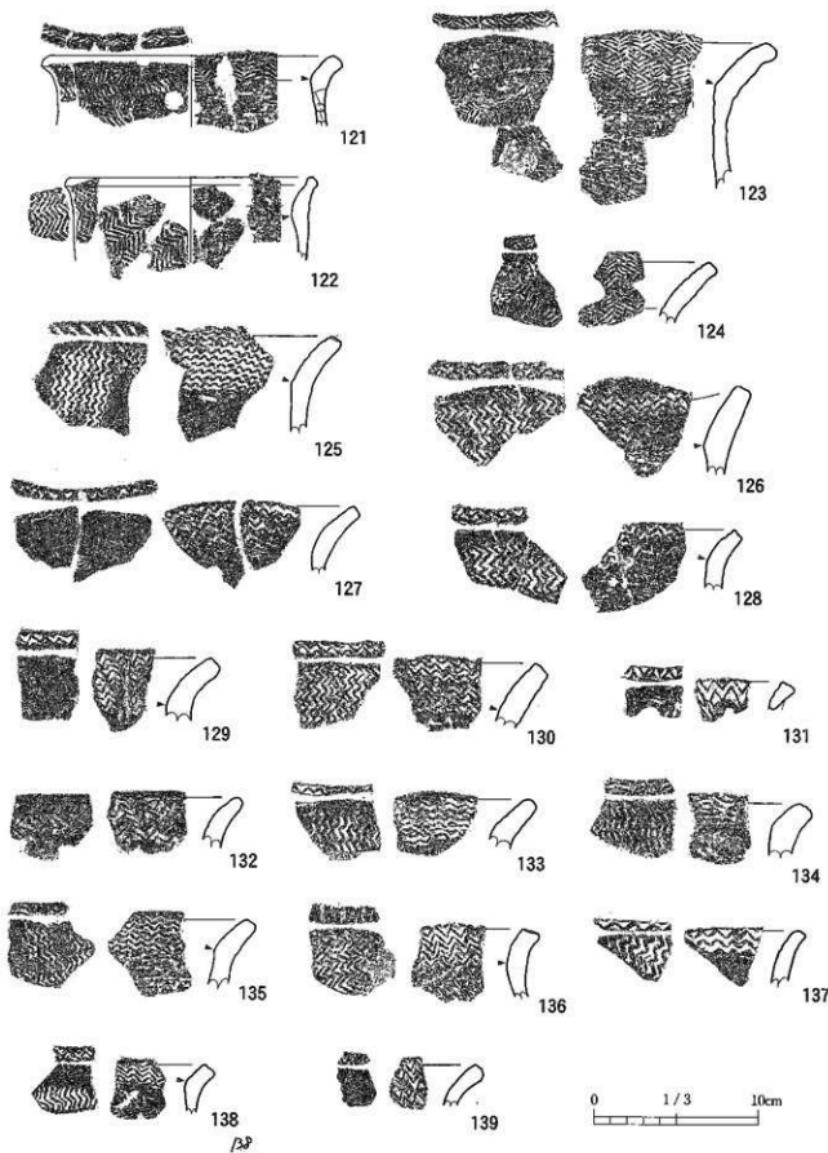
第42図 出土土器(9)



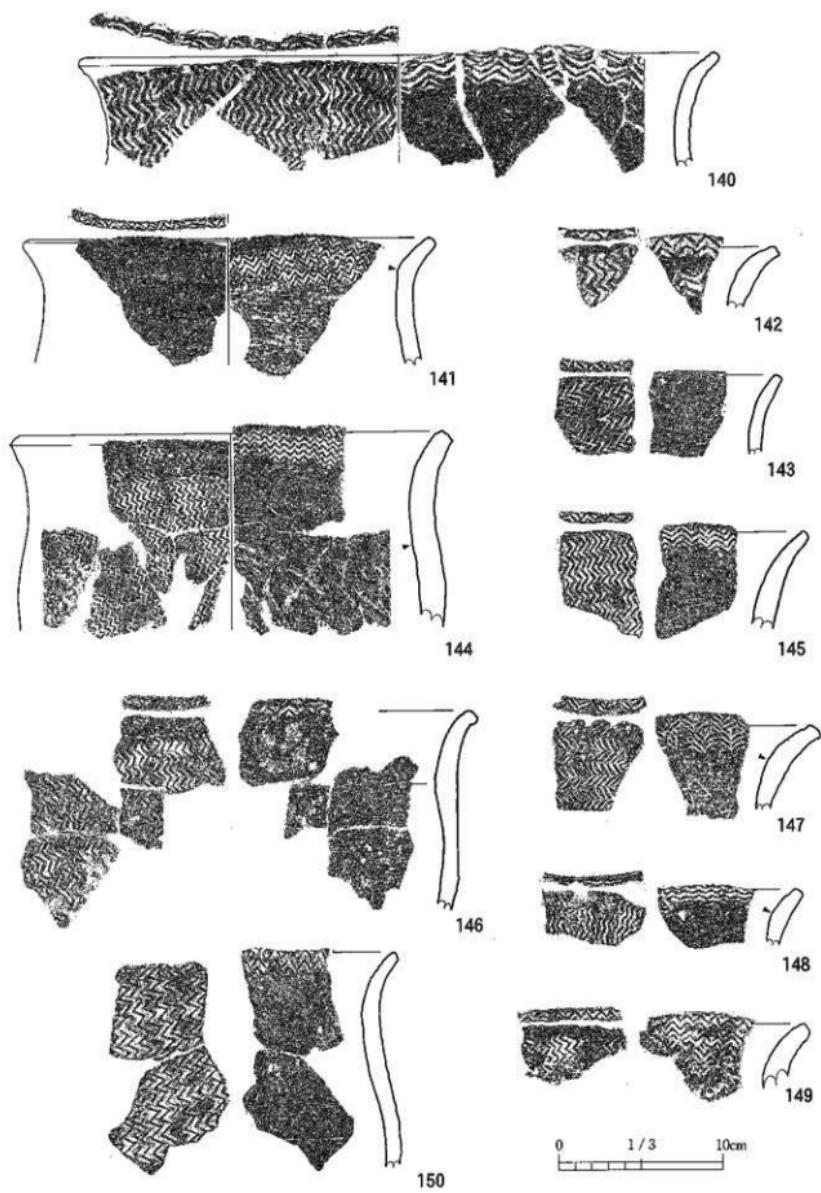
第43図 出土土器 (10)



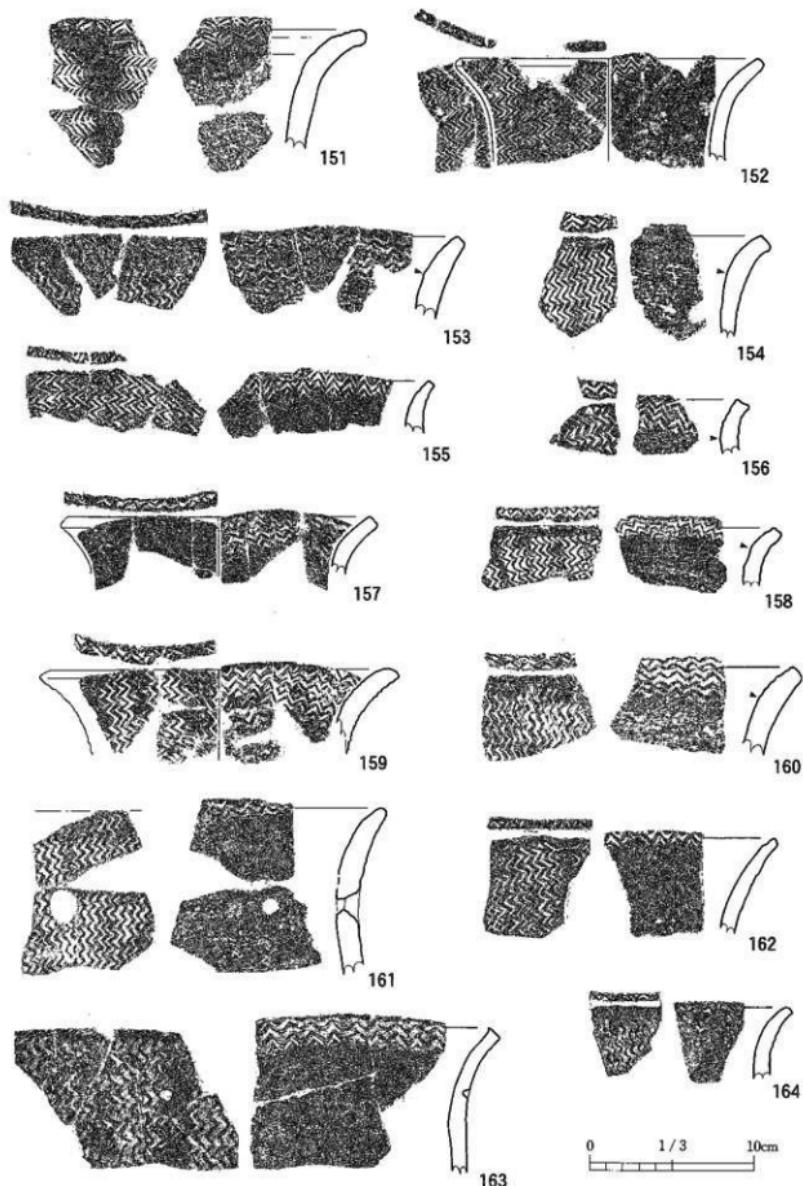
第44図 出土土器(II)



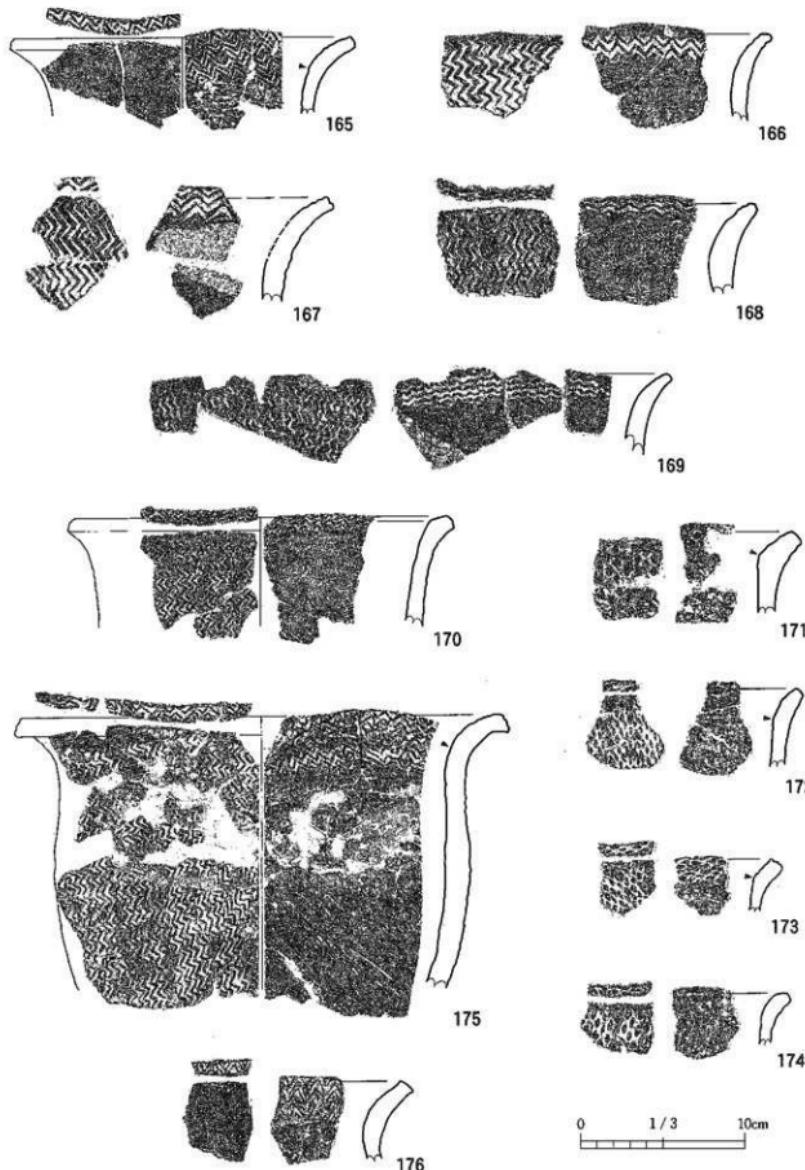
第45図 出土土器 (1)



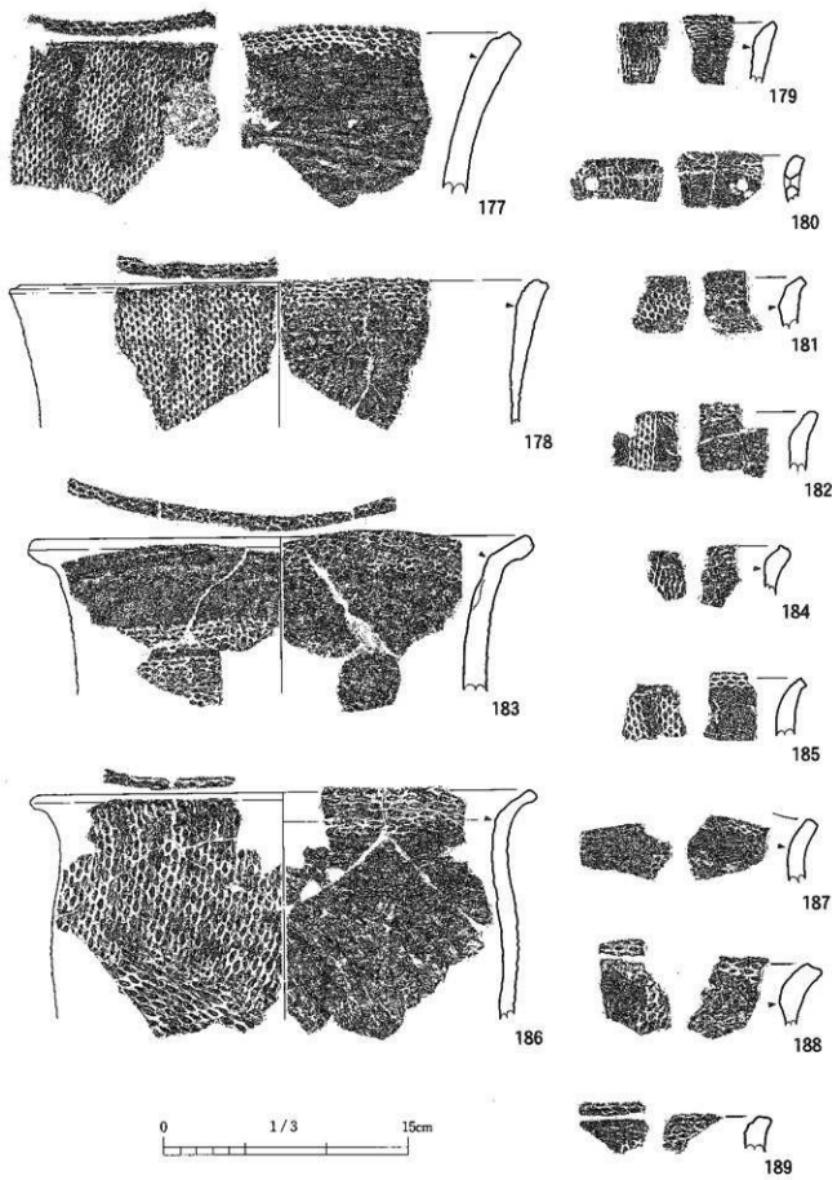
第46図 出土土器(13)



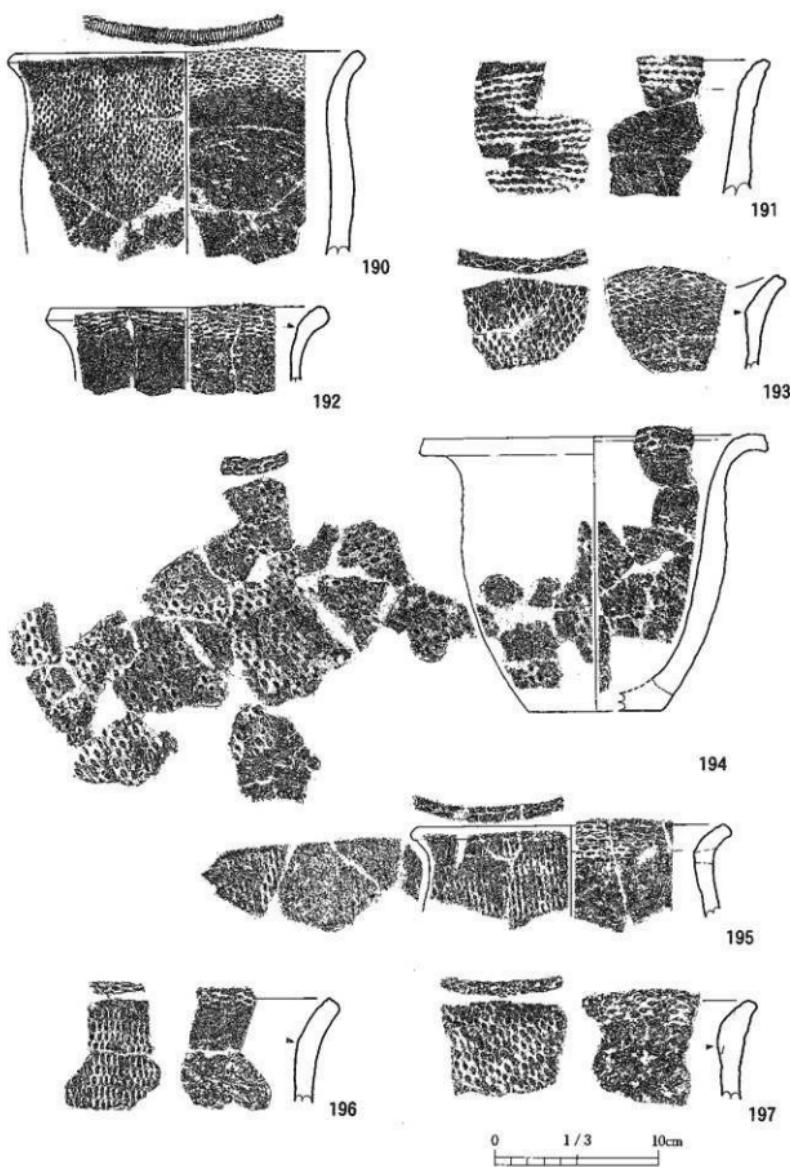
第47図 出土土器 (14)



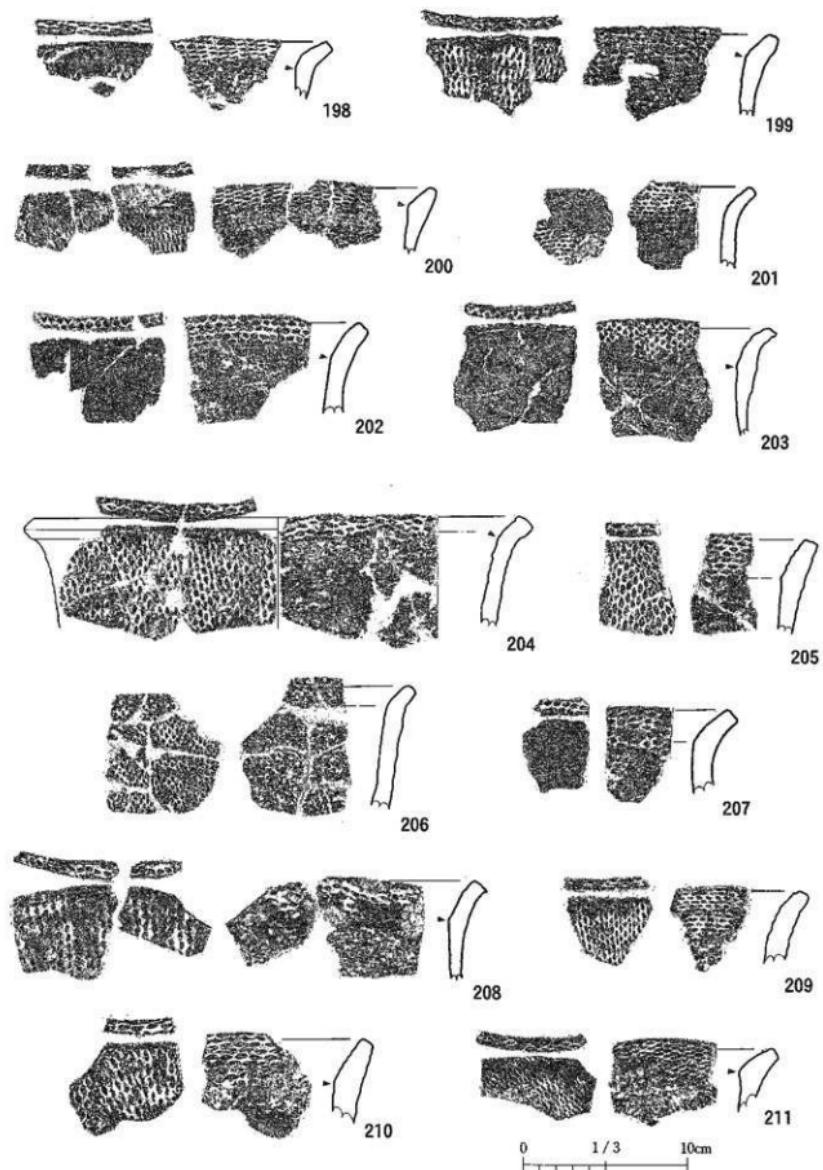
第48図 出土土器(15)



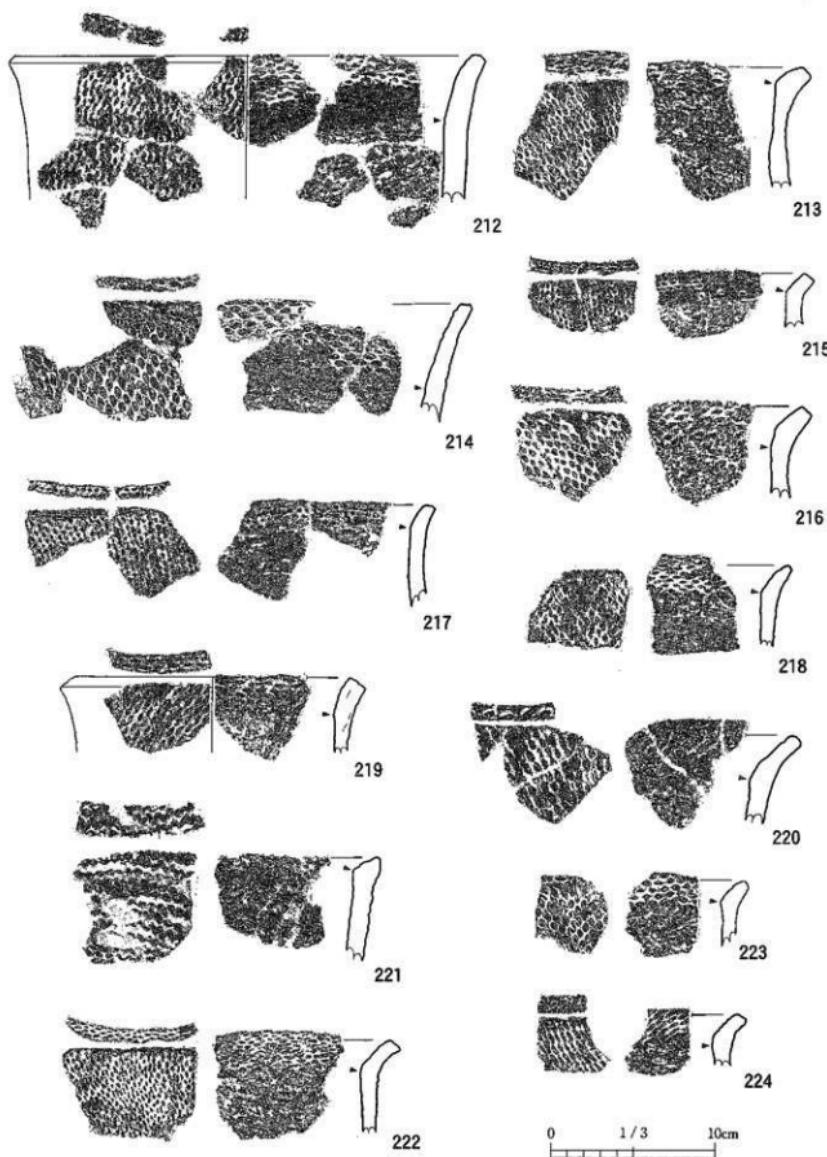
第49図 出土土器 (16)



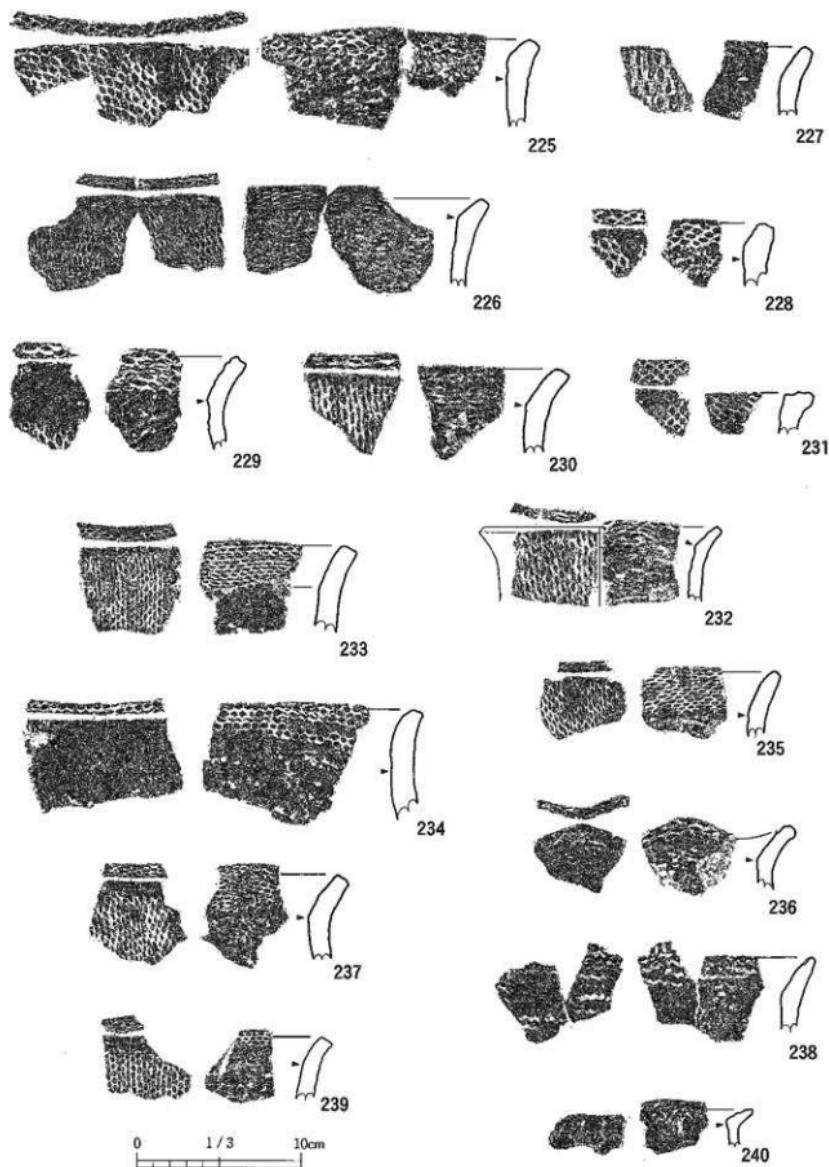
第50図 出土土器(17)



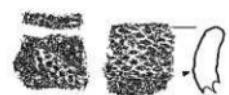
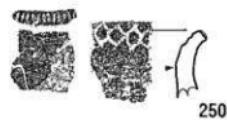
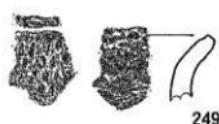
第51図 出土土器 (18)



第52図 出土土器(19)

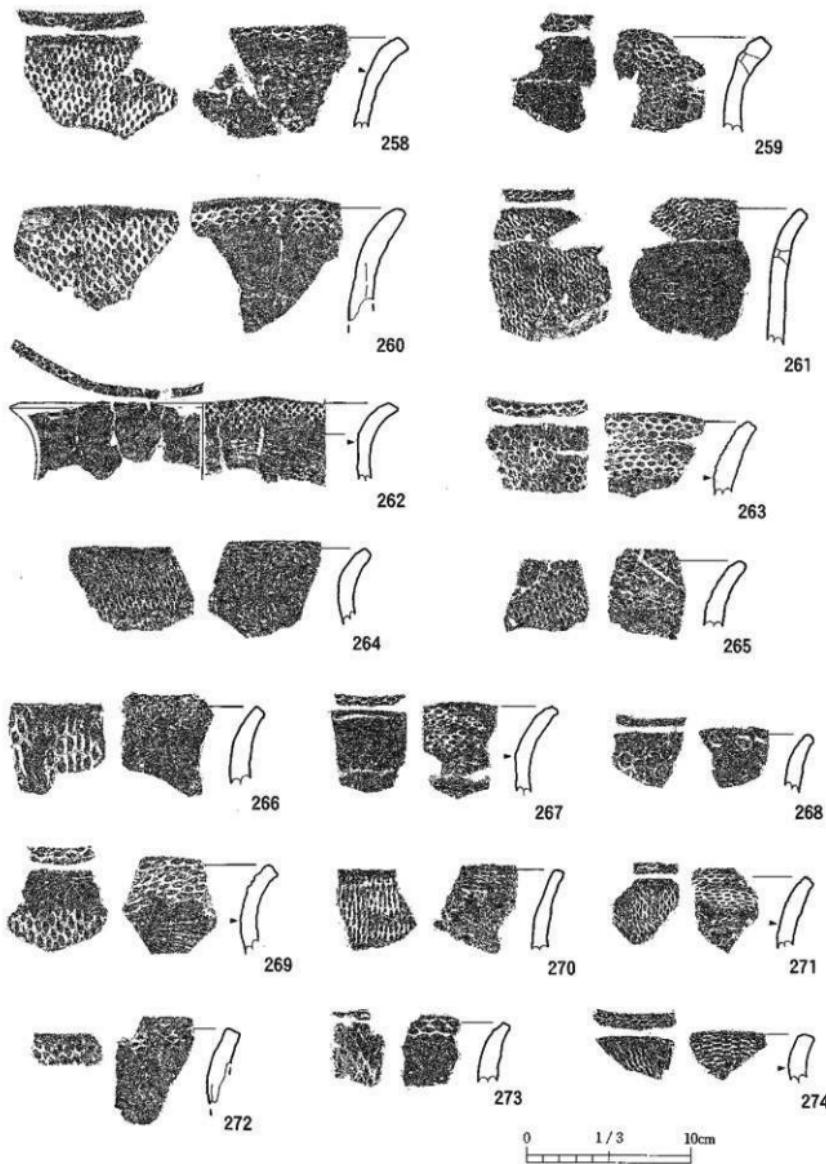


第53図 出土土器 20

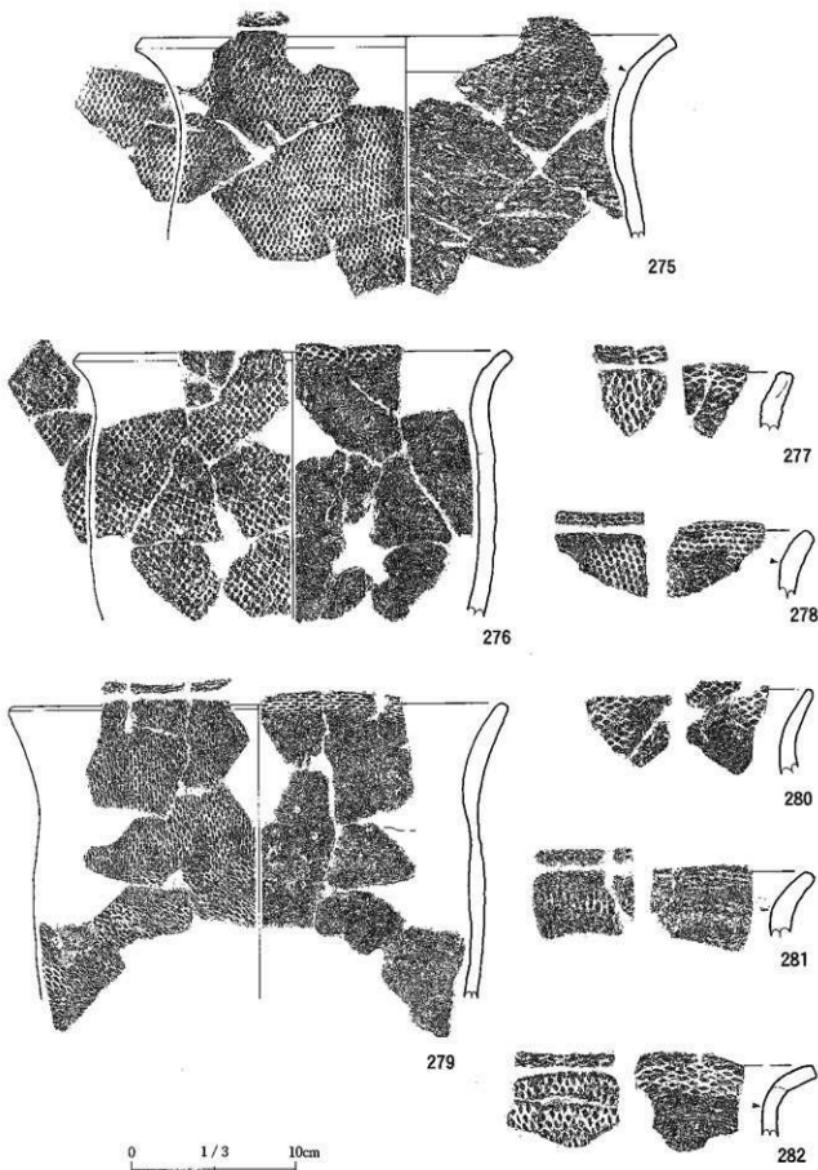


0 1/3 10cm

第54図 出土土器(2)



第55図 出土土器 (2)



第56図 出土土器 (23)